

---

# 古代アメリカ学会会報

## 第49号

---



図版 カサブランカ遺跡公園（2013年） ©五木田まきは

---

### 目次

---

◆会長あいさつ	1	◆研究懇談会の報告	23
◆第15期（2025年～2026年） 役員選挙の結果について	3	◆本学会協力・後援事業の報告	25
◆特集：研究現場のダイバーシティ最前線	4	◆事務局からのお知らせ	29
◆自著紹介	17	◆編集後記	33

---

2024年7月

\*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます

## 会報第 49 号の発行に寄せて

青山 和夫（古代アメリカ学会第 14 期会長）

古代アメリカ学会は、会員数が150人ほどの小さな学会ですが、志の高い役員と会員の皆様の献身的な努力と活躍によって前進し続けています。



第14期（2023年1月～2024年12月）の学会運営は、代表幹事の井上幸孝さん、事務幹事の中川渚さん、事務幹事補佐の荘司一步さんをはじめとする役員、各委員会・WGのメンバーに支えられました。そして、監査委員の渡部森哉さんと松本雄一さんには、学会を運営する上で適宜有益なご助言をいただきました。皆様に心から感謝申し上げます。

会報第 48 号の「会長あいさつ」でも述べたように、学会の基本的・長期的な目標は、①研究水準の強化、②国際化、③研究成果の社会還元と次世代の育成の 3 本柱です。いうまでもなく古代アメリカ学会は、南北アメリカ先史学・考古学とその関連分野の研究の発展に寄与する学術団体であり、研究水準を強化し続けていかなければなりません。

古代アメリカ学会研究大会・総会は、2020 年からコロナ禍でオンライン開催を強いられていましたが、2022 年 12 月に名古屋大学で 3 年ぶりに対面で開催され、従来の直接対面の質疑応答・議論や研究交流が活発に行われました。コロナ禍で中断していたメソアメリカとアンデスの現地調査は、2022 年から順次再開されました。その結果、2023 年 12 月に京都外国語大学で対面開催された第 28 回古代アメリカ学会研究大会では、調査速報・研究発表の総数が、前年の 15 本から 22 本に大幅に増加しました。懇親会も含めて大変行き届いた大会となり、参加した会員の満足度も高かったことと思います。研究大会実行委員長の大越翼さん、実行委員の南博史さんと佐藤吉文さん、研究担当の吉田晃章さん、代表幹事の井上幸孝さん、事務幹事の中川渚さん、事務幹事補佐の荘司一步さん、会計担当の荒田恵さんらのご尽力により滞りなく大会を進めることができました。

深く御礼申し上げます。第 29 回古代アメリカ学会研究大会・総会は、2024 年 12 月に慶應義塾大学日吉キャンパスで対面開催されます。より多くの会員の皆様が、最新の研究成果を発表されるのを楽しみにしています。

コロナ禍ではオンライン開催だった研究懇談会は、東日本幹事の金崎由布子さんと西日本幹事の土井正樹さんの企画によって、それぞれ 2024 年 3 月 9 日に東京大学、4 月 6 日に関西外国語大学において対面で実施され、大変活発な議論が行われました。東日本研究懇談会は、アンデス文明に関する 2 本の修士論文発表会でした。大学院生が自身のこれまでの研究成果を報告し、今後の研究計画について広く意見を交換する場が設けられました。今後もこうした機会を設け、若手研究者の研究の糧としたいと思います。またメソアメリカ文明を専攻する大学院生の奮闘を待っています。

**Publish or perish**（出版か死か）。研究ポストをゲットするためには、とにかく論文を書くしかありません。学者の使命は、より良い研究を行って、その成果を本や論文として出版し続けることです。会誌は学会の顔であり、質と量をより一層高めていかなければなりません。それゆえ第 14 期では、編集委員会の人数を従来の 3 人から 4 人（主：大平秀一さん、市川彰さん、鈴木真太郎さん、森下壽典さん）に増員しました。2023 年の『古代アメリカ』第 26 号（153 ページ）は、2022 年の第 25 号（113 ページ）よりも 40 ページ増えました。

『古代アメリカ』第 26 号では、論文 1 本と調査研究速報 5 本の他に、日本の古墳研究の第一人者である松木武彦さんとグアテマラ人考古学者の Héctor E. Mejía さんという 2 人の非会員に書評の依頼原稿を寄稿していただきました。後者は、スペイン語の書評であり、学会・会誌の②国際化にも繋がるでしょう。寄稿規定には「投稿とは別に編集委員会がテーマを定め、原稿を依頼する場合もある。この依頼原稿については、第一著者の

会員資格の有無を問わない」と明記されています。今後も必要に応じて、編集委員会から非会員の研究者に『古代アメリカ』の原稿を依頼していただければと思います。また言語の制約は定められていないので、外国人研究者に英語やスペイン語の依頼原稿も寄稿していただければ幸いです。

繰り返し強調しますが、研究者の会員には、国際学会、学会の研究大会や研究懇談会等で積極的に研究成果を口頭発表するだけでなく、論文や本として出版する使命があります。その意味で、研究成果を出版する場として会誌を有効に活用していただきたいと考えます。一方で、『古代アメリカ』に潜在的に投稿可能な会員と潜在的な査読者に関して、学会の人材は極めて限られています。小さな学会なので、査読者の方には「落とす」ためではなく、より良い論文・調査研究速報として会誌に掲載できる水準に高めるための建設的な査読コメントを提供していただけるように強く希望します。御存知のように、本学会よりも規模の大きい日本文化人類学会では、以前は会誌『文化人類学』の投稿論文に非常に厳しい査読が行われていましたが、最近では修正加筆してできる限り掲載する方向で建設的かつ懇切丁寧なコメントが付与されるようになってきました。『古代アメリカ』の査読者の方々には、会誌の研究水準の強化のために、どうかご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

近年、以前よりも多くの会員、特にこれから古代アメリカ研究を背負っていく中堅・若手研究者が、国際査読雑誌に英語の論文を続々と出版されていることを、私はとても頼もしく思っています。会員の皆様が、研究成果をスペイン語で現地の社会や研究者に還元するだけでなく、国際査読雑誌に積極的に英語で発信して世界の古代アメリカ研究の発展に寄与することを大いに期待しています。

③研究成果の社会還元と次世代の育成としては、2023年には日本全国の教員と生徒が使用する中学歴史・高校世界史の教科書における古代アメリカの記述の改善に力を入れました。なぜならば教科書の改善は、研究成果の最大の社会還元の一つであり、次世代の育成に繋がるからです。私を座長とする5人の会員（他に井上幸孝さん、吉田晃章さん、渡部森哉さんと松本雄一さん）で構成した中学歴史・高校世界史の教科書の改善案作

成WGは、2023年度の中学歴史と高校歴史総合・世界史探究の全27冊の教科書における古代アメリカの記述を検討して、教科書を作成している全ての出版社に教科書改善案を送付しました。また全国の教員が古代アメリカをきちんと教育する学習指導要領が策定されるように、文部科学大臣と文科省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室に教科書改善要望書を会長名で提出しました。さらにWGの活動内容を共著論文として『古代アメリカ』第26号に出版しました。今後も教科書が改善されるように、学会として文部科学省と教科書会社に粘り強く働きかけていきたいと思っています。

歴史教育への貢献と研究成果の普及は、古代アメリカ学会と会員、そして全ての歴史研究者の重要な任務です。学会にとって、広報・発信は重要課題の一つといえます。学会ウェブサイト有效果的かつ円滑に運営して下さった松本剛さんと、スペイン語版担当のダニエル・サウセドさんに深く感謝申し上げます。また『古代アメリカ学会会報』（担当：五木田まきはさん、瀧上舞さん）の質・量が、特集を組むことによって大幅にレベルアップしています。2023年の第48号ではポスト・コロナ時代の研究活動、2024年の本号では研究現場のダイバーシティ最前線に関する特集が組まれました。会報のPDF版を学会ウェブサイトで公開して、様々な会員の研究活動における多様な取り組みを学会の内外で共有することができました。次号の会報は、記念すべき第50号です！

本学会の協力・後援事業としては、たとえば、荒田恵さんを中心に天理大学附属天理参考館が、ペルー独立確立200周年2024 天理大学附属天理参考館第95回企画展「器にみるアンデス世界—ペルー南部地域編—」（2024年4月17日～6月3日）と日本 ペルー外交関係樹立150周年記念 天理ギャラリー第180回展「アンデスのツボ — 器で旅する北ペルー —」（2023年9月9日～12月2日）を主催しました。さらに国内の3つの博物館・美術館で開催された特別展「古代メキシコ—マヤ、アステカ、テオティワカン—」に関連して、井上幸孝さんを中心に専修大学コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科が公開講座「メキシコ古代文明への誘い—マヤ、アステカ、テオティワカン—」（2023年8月1日）を主催しました。

この特別展は、東京国立博物館（2023年6月16日～9月3日）、福岡県太宰府市の九州国立博物館（2023年10月3日～12月10日）、大阪市の国立国際美術館（2024年2月6日～5月6日）を巡回し、来場者が50万人を超えました。杉山三郎さんや猪俣健さんらが監修し、複数の会員が公式図録の翻訳や執筆に携わると共に、特別展に関連したNHKの様々なテレビ番組が放映され、複数の関連書籍が出版されました。

ちなみに私は、古代アメリカ学会の会長として特別展に関連したNHK教育テレビ『視点・論点』の「マヤ文明 最新の研究成果」（2023年5月2日）に出演し、猪俣健さんと塚本憲一郎さんらとNHK総合テレビ「上白石萌音のはるかなる古代文明 マヤ」（2023年8月10日）とNHKBSテレビ「はるかなる古代文明 マヤ 生命はめぐり神は降臨する」（2023年12月9日）に出演して両番組を監修すると共に、関連一般書『カラー版マヤと古代メキシコ文明のすべて』（宝島社新書）や『古代アメリカ文明：マヤ・アステカ・ナスカ・インカの実像』（講談社現代新書）を上梓して、微力ながら古代アメリカ研究の裾野を広げるよ

うに努めました。さらに2023年度駒澤史学会大会記念講演（2023年6月17日）、茨城大学図書館土曜アカデミー（2023年7月8日）、NHK文化センター柏教室（2023年8月5日）、朝日カルチャーセンター新宿教室（2023年8月26日）、いきいき大学（千葉市市民会館大ホール、2023年10月2日）や常陽藝文センター（2024年5月10日、17日、24日）等において講演し、特別展に関連した古代アメリカの研究成果を日本社会に還元するために奮闘努力しました。

今年実施された選挙で、第15期（2025年1月～2026年12月）の会長として私が再選され、代表幹事として渡部森哉さんが選出されました。引き続き役員と会員の皆様と共に、古代アメリカ学会と日本の古代アメリカ研究を盛り上げ、発展させていきたいと思っております。学会活動への積極的なご参加と運営へのご協力をくれぐれもよろしくお願い申し上げます。

---

---

## 第15期(2025年～2026年)役員選挙の結果について

---

---

本年5月20日（月）から6月2日（日）までの期間に郵送投票で実施された第15期役員選出選挙につきまして、6月8日（土）に青山学院大学で開票作業が行われ、以下の方々が当選いたしました。学会の運営につきまして、会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

新会長 青山 和夫（茨城大学）

新監査委員 松本 雄一（国立民族学博物館）

新代表幹事 渡部 森哉（南山大学）

村野 正景（静岡大学）

近年は女性の社会進出だけでなく、男性の育児参加、年配研究者と若手研究者の共同現地調査、多国籍研究チームなど、研究現場の多様性が高まっています。しかし、日本における研究者を取りまく環境は十分にダイバーシティな現場に対応できているとは言えません。そこで調査研究におけるダイバーシティの最前線に関する様々な経験・意見について、5名の方々に記事をご執筆いただきました。

### ●中米における研究（仕事）と子育て

柴田 潮音（元エルサルバドル文化省）、五木田 まきは（東京藝術大学）

2024年6月12日に世界経済フォーラムによるグローバル・ジェンダー・ギャップ指数（The Global Gender Gap Index：GGGI）が公開され、日本は146か国中118位であった。2023年の125位からは若干の前進を見せたものの、G7では最下位、全体としても下位である。経済、教育、健康、政治の4分野からなる指標であるが、日本は経済（120位）と政治（113位）分野が低いスコアとなっている。労働人口に占める女性の労働参加率は低くはないものの、職場における女性管理職の割合の低さや男女間の所得格差などが依然として大きな課題となっている。

研究現場においても、最新の文部科学省の学校基本調査によると、大学教員における女性教員比率は27.2%で、助手57.4%、助教32.9%、講師34.6%と若手ポストで3割を超えるのに対し、教授19.3%、学長14.4%と上位職になるにつれて低くなっている。国立大学では更に下がり女性教員比率が19.7%、教授は14.8%、学長は4.7%である。これらの数字を見ると、学術分野においても女性の社会進出は未だ途上であるといえるだろう。

一方、本学会会員のフィールドであるラテンアメリカのGGGI順位を見ると、最高位がニカラグアの6位、最下位のエルサルバドルが96位とすべての国が日本より高い順位に位置づけている。では研究現場ではどうなのだろうか。本特集にあたり、エルサルバドル在住の柴田潮音氏に中米での仕事、研究、そして子育てについて自身の経験を綴っていただいた。

### はじめに

中米エルサルバドルへ来て30年が経とうとしている。最初の5年間は京都外国語大学の考古学調査プロジェクト、2000年からはエルサルバドル文化芸術審議会（現在の文化省）文化遺産局考古課に職を得て、埋蔵文化財行政の仕事に携わってきた。

2000年5月、エルサルバドルの元協力隊隊員の女性と結婚し1女1男を授かり、長女の藍里は本年の7月でガストロノミーを専門とする大学を卒業する。弟の禅志は医学部に進学したため卒業までまだ年月がかかるようだ。両親は共働きであったにもかかわらず、ふたりともよく育ってくれたと思う。これには家政婦さん、ご近所のみなさん、エルサルバドルの職場の人々の存在が大きかったと思う。そのあたりの事情を述べてみたい。

### 家政婦さんと発掘調査

2001年9月に娘が誕生し、間借りしていたサルバドル人家族の家から首都サンサルバドルに隣接する町のテラスハウスにその年の12月に引っ越した。カミさんの育休の終了時期が近づいてきていたこともあり、共働きである我々は知り合いの紹介で家政婦さんを雇うことにした。

当時のエルサルバドルでは家政婦さんの賃金はメキシコ・中米の他の国々と比較して安く、我が家の家計でも雇うことができた。

家政婦さんには通いで月曜日から金曜日まで来てもらい、赤ちゃんの世話、掃除・洗濯、夕食の準備をお願いした。彼女は早朝6時過ぎには我が家へ到着し、我々は仕事場へと急ぐ。職

場が午後4時でカミさんより早く終わる私が夕方5時前には基本的に帰宅し、家政婦さんは家路へついた。そんな毎日であった。

しかし、我が家の引っ越しが一段落するかしないかのところで緊急発掘調査の仕事が舞い込んだ。調査地はチャルチュアパ市内の宅地開発予定地で、タスマル遺跡公園の道を挟んで北側に位置するヌエヴォ・タスマル地区。チャルチュアパ遺跡群のひとつである。首都から約80キロメートルのところにあり日帰りも可能であるが、往復にかかる時間やガソリン代を考えると、カサブランカ遺跡公園内の研究施設に寝泊まりしての2カ月にわたる調査となった。もちろん、カミさんと家政婦さんに娘のことはお願いしての泊まり込み調査であった。

チャルチュアパでの緊急発掘調査を終えしばらく平穏な職場通いとなったが、その年の11月頃、エルサルバドルの東端にあるフォンセカ湾の入口に面したチキリン村という漁村で、民家の井戸穴を掘っていたところ大量の彩文土器や人骨が出土したという匿名の電話連絡を受けた。考古課の同僚が現場へ赴き出土遺物の引き渡しを渋る所有者を市長の助けでなんとか説得し、首都にある国立人類学博物館へ運び込んだ。

現場を見てきた同僚の話によると、出土地点とその周辺には大量の貝殻が散乱していたとのこと。恐らく、先スペイン期の貝塚か何かの遺構に当たったのであろう。学術的にも貴重な発見であることから2002年12月から約3カ月にわたる緊急発掘調査を実施した。

ただし、当時の考古課は課長を含め6名の調査員しかおらず、他の仕事もこなさねばならない。1週間の調査時間も制限された。水曜日に現地入りし、実質2日半の発掘調査で土曜日の午後には首都へ戻るというルーティーンであった。

チキリン村は首都から東へ160キロメートルに位置する。そのため今回も泊まりの現場となった。宿泊先は、当時の文化芸術審議会文化スペース局の管轄する、ラウニオン市にある「文化の家」である。そこから車でチキリン村の現場へ向かう。

海浜部の発掘現場は厳しい。日差しはきつく高温多湿である。日の出とともに早朝の涼しい時間帯に作業を開始し昼過ぎには終了する。あ

まりのきつさに、現地で雇用した作業員が翌週には来ず、別の人が働きに来たりした。

チキリン村での緊急発掘調査でもカミさんと家政婦さんに娘と留守宅をお願いした。特に、カミさんは第2子を身籠っており無理を言ったと思う。

チキリン村での発掘調査が終了してほぼ一カ月が経った2003年3月末、息子が元気に誕生した。

しかし、家政婦さんひとりでは二人の乳幼児の面倒をみるのは難しいと言う。上の娘が保育園に入るまでの数カ月だがもうひとり家政婦さんを雇うことにした。

そして、その年の6月には娘がサニーデーズという私立保育園へと通い始めた。カミさんの元同僚であった辻本さんが娘の絵理香ちゃんと息子の大地くんを既に通わせていたこと、彼らはうちの娘といつも一緒に遊んでおり兄弟姉妹のような間柄であったこと、さらに私の職場であった国立人類学博物館に近いということでサニーデーズに通わせることに決めた。

保育園は朝の8時に始まり正午に終了。安全性と利便性の点から公共交通機関であるバスでの通園はやめ、私かカミさんによる保育園への子供の送迎が日課となった。

また、10時のおやつにとカニさんやクマさんなど動物の形をした手作りパンを持たせたり、キャラ弁とまではいかないが栄養と彩を考えてミニ弁当をつくって持たせたりした。いつも気ままに発掘調査へ出させてもらっていたので、この仕事は私の担当となった。

娘を保育園に通わせ始めて1カ月、ヌエヴォ・タスマル遺跡での緊急発掘調査が再び実施されることになった。今回は2003年7月末から約3カ月間で、娘のおやつやミニ弁作りと生まれて4カ月の息子をほったらかして泊まり込みで現場へ出ることは流石にできず、サンサルバドルからの通いとなったのである。

そして、翌2004年7月には息子が1歳4カ月でサニーデーズへ通園することとなった。おやつパンやミニ弁づくりが2倍となったが、「おいしかったあ！」と言ってくれるチビたちの顔を見るにつけ、明日も頑張ろうという気持ちにさせてくれたのである。

## 家族と過ごしたカサブランカ遺跡公園

京都外国語大学チャルチュアプロジェクトの終了後、伊藤さん（名古屋大学大学院人文学研究科助教）とエルサルバドル考古学プロジェクトを2000年9月に立ち上げ、再びカサブランカ遺跡公園を拠点に考古学調査を始めた。

伊藤さんがエルサルバドルに来て考古学調査を行うのは、大学が休みとなる春先と夏である。私のプロジェクトへの参加も文化遺産局局長に認められてはいたものの、本業との関係から土日のみであった。初期の頃はカミさんと娘を自宅に残して調査に参加。そうこうしているうちに2002年8月22日には藍染工房を併設する資料館が開館し、カサブランカは遺跡公園として一般に公開されるに至った。

そして、息子が生まれてからは、自ずと家族全員で週末にはカサブランカ遺跡公園へ行くことになった。乳幼児を連れての泊まりの移動となると粉ミルクに哺乳瓶、着替え、オムツ、乳母車など荷物が山ほどになるが、子供の成長につれてそれら必需品の量が少しずつ減っていった。

土曜日の午前中に自宅を出てカサブランカ遺跡公園へ行く。到着するや否や娘はいの一番に藍染工房へ。インストラクターのクルシータさんやエミリアさんの横に座り、持って行った鉛筆やクレヨンで絵を描き始める。

保育園児となった息子は、資料館と研究棟の間のスペースで自分の身体よりも大きな盥に泥水を溜め、そこらで拾ってきた木の枝でかき混ぜている。遺跡資料館事務長のロベルトさんが「禅志！何してるの？」と尋ねると、「オルチャッタを作ってるんだ。」と。オルチャッタは米粉を原料として砂糖やシナモンを混ぜて作るエルサルバドルの伝統的な飲物で、色が似ているので連想してそう言ったのであろう。ロベルトさんは笑いをこらえながら「うまくできたか？」と聞くと、「おいしいよお！」だそうだ。彼は思わず吹き出してしまったと言っていた。

こうして遊ぶ子供たちとは別に、私は伊藤さんに発掘現場の進行状況を見せてもらったり研究棟で遺物整理に参加したりした。カミさんは読書や昼寝に精を出していた。

乳幼児の成長は速い。幼稚園の年長さんになると子供たちの動きも変わっていった。娘はい

つもの工房でクルシータさんやエミリアさんのお手伝いをしながら、ろうけつ染めの下絵を描いたり絞り染めの結びをするようになった。息子は遺跡公園作業員のフリオさんの後ろにくっついて遺跡公園の森を「探検」する。

雨期の頃になると木の幹に下から上までびっしりと斑色をした芋虫がくっついていることがある。この芋虫は害虫ではないのでフリオさんが手で取って息子に見せると、始めは驚いて逃げようとしていたが、そのうち慣れて自分でも芋虫を掴めるようになった。挙句の果てには、「飼ってみたいのでお家へもって帰りたい！」と言い出す始末。これにはカミさんのダメ出しに遭ってしまった。

こうした楽しい経験が幼少期にできたのもカサブランカ遺跡公園のスタッフの皆さんのおかげである。彼らは男女関係なく本当にやさしく、我が子たちをかわいがってくれた。というよりも、サルバドル人自身が近所の子供たちを含め誰彼となくやさしく接し大切にしてくれる。ここはまったく『三丁目の夕日』の世界である。

## おわりに

元協力隊隊員だったためエルサルバドルの公立学校の状況をよく知っていたカミさんの意見から、子供たちはインターナショナル校の幼稚部に通わせることとなった。そこには保育園の頃と同様、辻本さんちの「絵理香ねえちゃん」と「大地にいちちゃん」がすでに登園していたので親として心配することはほとんどなかった。

しかし、教育の質は非常に高いが、学費も非常にかかる。それに比べて日本における公立の小・中・高での教育の質の高さ、かかる費用の安さはうらやましく見えた。ただ、子供たちの通ったインターナショナル校では一学年の学生数が少ないこともあり先生方の対応がきめ細やかだったのは良かったと感じた。

子供たちが同校中等部に進学する前に学校側からの通知で、学費が値上がりすること、高等部ではさらに高くなることを知った。家計における教育費の占める割合がかなり高くなってきたため、中等部進学時に家政婦さんの雇用を断念した。朝食・お弁当・夕食の担当が私にまわり、カミさんは家の掃除と営繕、洗濯の役割を担当した。

子供たちが中学生の頃、学期間の休みに国立博物館にある職場へ連れて行ったことがある。職場の仲間たちは子供たちを歓待してくれた。こうした大らかさもサルバドル人の特徴である。

午前中は考古課の作業室で土器洗いをしてもらい、午後には博物館の図書館で勉強するというのを二人はしていた。おかげさまで、藍里も禅志も考古学とは全く関係ない生産的な分野へ進学してくれた。早めの土器洗いという「ワクチン接種」が功を奏したのかもしれない。

(柴田潮音氏)

中米、エルサルバドルにおける仕事と育児に関する柴田氏の経験からは、家政婦さん、遺跡公園スタッフ、職場の同僚など、家庭以外のサポートの重要性がわかる。筆者のフィールドは隣国ホンジュラスであるが、調査時にホームステイするご家庭では、掃除や洗濯はお手伝いさんが行っていた。料理は基本的にお母さんがするが、商店でトルティーヤとチキン、ププサなどを買ってくることもしばしばあった。お子さんは高校生と大学生とすでにほとんど手が離れていたため、手のかかる時期の子育ての現場を見ることは叶わなかったが、大都市ではなく地方の町ということもあったからか、町全体が顔見知りで、誰がどこの子なのか、その親は何をしているのか、などよく把握しており、大人も子どもも歩いているとよく声を掛け合っていた。地域で子育てをすることはこういうことかと思っただ記憶がある。

筆者は現在1歳の子の育児中である。両親・親戚が近所にいるわけでもないため、自分と夫以外の手は地域の公的・私的サポートに頼ることになる。保育園以外にも、子育て支援センタ

ー、一時預かり、病児保育、ファミリーサポートなど、様々なサービスを利用している。しかしこれらのサービスは事前予約が必要であったり、利用時間や条件が限られていたり、突発的な事態で本当に困ったときには実はそれほど頼りにならない。筆者の場合は、出産に合わせて夫が長期の育児休業を取得し、すべての家事・育児を夫婦で分担した。それぞれ得手不得手や、子の好みもあるため、完全にすべてを共同しているわけではないが、同じレベルの問題意識をもって取り組んでいることは、安心して仕事に復帰できた大きな要因であると感じている。

厚生労働省の調査によると、日本における男性の育児休業の取得率は増加傾向にはあるものの2022年で17.13%と、女性の80.2%に比べると大きな差がある。本特集にあたり、男性の育児休業取得者にぜひ執筆していただきたいと探したが、古代アメリカ学会関係者で会報担当が探せる範囲では該当者を見つけることができなかった。もし本稿をお読みの方で育休経験者がいたら、ぜひその経験を寄稿していただきたい。

#### 参考文献

厚生労働省 (2023) 「令和4年度雇用均等基本調査」の結果概要

文部科学省 (2023) 学校基本調査  
<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400001&tstat=000001011528>

World Economic Forum (2024), *The Global Gender Gap Report 2024*



## ●オンライン GIS を利用したダイバーシティへの試み

伊藤 裕子（リヤマプロジェクト）

### はじめに

人類史に残る新型感染症の大流行を経験した2020年以降、特に国外をメインフィールドとする研究者にとって、研究活動の実施および計画の策定には大きな変化が生じている。たとえば移動手段や現地での宿泊、ミーティングのやり方、調査研究の実施方法にいたるまで、さまざまな国家団体の方針および現地情勢の変化に合わせ、逐一对応せざるを得ない状況になった。

そのため幅広い分野において、良くも悪くも社会変容と呼ぶべき現象がみられたが、その中でもプラスの効果の例としてよく挙げられるのが、デジタルデータの活用や相互交流のオンライン化をはじめとする、いわゆるデジタルトランスフォーメーション（DX）への動きが急速に進んだことである。

全世界規模での移動制限という、過去に例のない特殊な時期を経て、学術研究のみならず多くの業界で急速にデジタル機構やオンライン会議などが導入されることになったが、これはまた同時に、昨今のビジネスシーンにおいて高まりつつある「ダイバーシティ・インクルージョン」への訴求に合致した動きでもある。

今般の避けがたい少子高齢化により労働力人口が減少していく日本では、さまざまな特性や背景事情を抱えるすべての人が、労働にやりがいを持ちつつ、各々活躍できる社会の実現が求められている。同じプロジェクトにかかわる多様な人材が、それぞれの能力を最大限発揮できるように場を整えることで全体の活力向上を目指す、というダイバーシティ・インクルージョンの目的に沿った各種変革の取り組みは、課題は多々あるものの、現代社会においてはおおむね歓迎されていると感じられる。その中でも特に業務のオンライン化によるDXが果たす役割は大きく、今後より一層の拡充が図られるべき領域であると考えられる。

そこで本稿では、筆者が現在参加している研究プロジェクトにて、研究代表者である瀧上氏の指揮のもと実施されているGIS（地理情報システム）データ共有の内容を紹介しつつ、特に

オンラインを活用した分業・協働による、現場レベルでのDXを利用したダイバーシティの実例を簡単にまとめたい。

### プロジェクト紹介

『生物考古資料にもとづく生業モデルの実証的研究とアンデス文明発展の機序解明』プロジェクト（2023～2027年）（通称「リヤマプロジェクト」）においては、ペルーにおける冷涼な高地高原地帯を起源として始まったラクダ科動物飼育と、比較的温暖な峡谷域を中心に広がったトウモロコシ栽培が結びついた複合型生業の成立過程を明らかにし、文明発展の機序解明を目指すため、従来の考古学調査に理化学的手法を組み合わせることを特徴としている。

本プロジェクトは多様な理化学的分析と、考古学的手法による現場調査との協働をうたっているため、研究分担者には考古調査を主な専門とするメンバーと、科学的分析を得意とするメンバーとが名前を並べている。私はその下で、GIS解析作業担当として参加させていただいている。

そもそも、複数の発信元からもたらされたさまざまな形式の調査結果を総合的に検討するために、GISを利用するメリットは大きい。GISとはあらゆる情報の地理的な把握又は分析を可能とするため、電磁的に記録された地理空間情報を一体的に処理する情報システムと定義されている（※1）。集められたさまざまなデータを管理集約し、ベースとなる地図情報の上に各種情報を重ねていき、地図上の要素の相関関係や傾向を可視化するためのツールである。多種多様な分野から寄せられたデータを層位（レイヤー）に分けて重ね合わせることで、異なる視座が得られることを期待する性質をもつシステムであり、そのカギとして使われるのが地理空間情報、つまり位置データである。

元来、この世界で得られるすべてのデータは地理空間情報を持っている。地理空間情報とは「どこで」、何が、いつ、どのような状態かとい

った、地球上の位置およびこれに関連づけられた情報であり、そのデータが採取された場所、移動や中心点の変化に関する記録、地域ごとに分類された数値など、各種データを空間座標および時間変化を軸にして多角的に分析することができる。近年はコンピュータの発展にともなう膨大なデータの扱いが容易になり、リアルタイムで変化するデータを表示・編集したり、シミュレーションをおこなうなど、従来の紙の地図ではできなかった高度な利用が可能になっている。

## オンライン GIS の導入

我々のプロジェクトでは、生物試料からストロンチウム同位体を測定する。各同位体の含有量はその土地の地質により異なっている。そして飲み水や食物中の水分を通じて吸収されるため、人間もしくは家畜の残存歯から得られる同位体比のデータにより、その出身地や生前過ごした土地を推定することができる。

この推定を実現するために有効なのが、ストロンチウム同位体比の分布状況を示すマップの上に、考古試料から得られた同位体比データを重ねる作業である。ストロンチウム同位体比の分布状況を反映するための地質図に関しては、OneGeology 国際プロジェクト (※2)、およびペルー国立地質鉱業冶金研究所 (INGEMMET) ポータルサイト (※3) の無償公開データを使用した。それらをベースとして地形状況に応じた地下水の移動による影響も考慮しながら、各ポイントの地質に含まれる同位体比と採取地の地質構造の比較検討を試みる。これにより同位体地図 (Isoscape/アイソスケープ) と呼ばれる同位体比の分布図が作成できる。

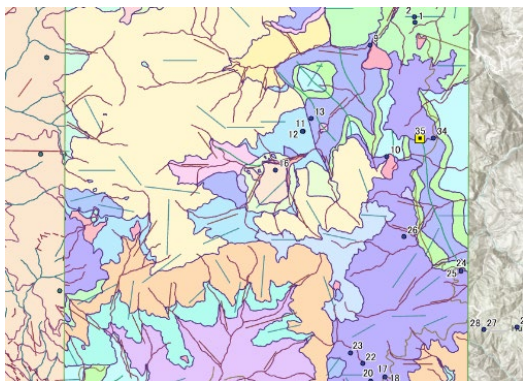


図1 GIS画面上での地質データプロット状況の例  
黒点が採集植物から地質の同位体比を得た地点。

かつまた、現地調査の試料採取場所や発掘データを空間的位置によってプロットすることで、プロジェクト全体の概観マップを作成することができ、個別の編集解析のみならず、プロジェクト進行中のメンバー間での打ち合わせや状況確認、研究成果の公開発表資料や出版向け図版などにも利用することができる。この汎用性の高さという GIS の利点を最大限に活用するため、我々は GIS データのオンライン共有体制を作って相互利用をおこなっている。

ArcGIS Online 上の組織サイトでは、セキュリティで保護されたクラウドベースの環境で GIS コンテンツを管理することができる。組織サイトのメンバーは、管理者権限によって作成したマップや他のコンテンツを共有したり、データを検索したり、Web 上に公開したりといった操作ができる。それにより、たとえばベースマップに標高地形と、地質図と、先行研究の遺跡分布状況を重ね、調査ルートや発掘計画を策定する際に役立てるといった、幅広い応用が可能となる。従来のように、一人が作って完成した地図データをただ共有するということからは一歩先へ進んで、メンバー全員が得られたデータを持ち寄り、それぞれの地理空間情報をカギとしてマッチングさせ、重ね合わせることによる相互作用でプロジェクトの推進力を高める効果をねらうものである。

## 働き方改革への合致

このデジタル化したデータの共有による相互作用こそがまさに DX の目指すところではあるが、冒頭で述べたように、この作用は同時にダイバーシティ・インクルージョン推進という面においても役立つ。我が国においては、少子高齢化に伴う生産年齢人口の減少、また育児や介護といった労働者それぞれの事情に応じ、多様な働き方を選択できる社会を実現するための「働き方改革」というものが提唱され、それを推進するための関連法律が整備されてきた。労働者一人ひとりの事情や希望に合わせて選択できる多様な働き方の一例として、オンライン環境を利用しての在宅勤務・テレワークによる柔軟性の高い勤務体制を選択肢に組み入れることが望ましいとされている。

一か所に集まらなくても、離れた場所からオ

ンラインでの分業や相互のやり取りができることによる効用には、近年コロナ禍をきっかけに多くの人々が実感したように、まず集合場所の確保や移動手段が不要になること、居住地の制約が少なくなること、時間の自由度が上がることなどがあげられる。これは特に、調査現場が遠い外国である研究者にとっては僥倖ともいえる利点であり、場合によっては仕事の進め方自体が大きく転換する可能性すら含んでいる。

今回のプロジェクトにおいては、現場調査および試料採集へ赴くメンバーと、試料の分析・実験を行うメンバー、GIS解析作業をするメンバーが、それぞれの専門分野を活かした分業体制をつくることで協働するという形になっている。これは単に指示されたパソコン操作をする作業員を雇うという話ではなく、GISという異種データの重ね合わせを得意とするツールを用い、各方向からフィードバックを繰り返すことで、プロジェクト全体の推進力の一助とする試みである。

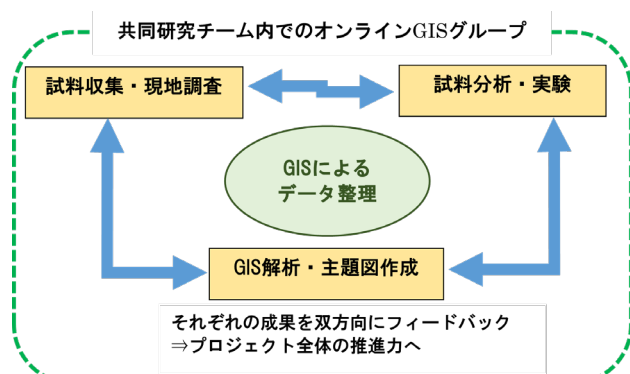


図2 オンラインGISを利用したプロジェクト推進のイメージ

## 今後の展望

個人的な印象ではあるが、従前のテレワーク・在宅勤務といえば「普段とは異なる外出先などの状況下で仕方なくおこなう副次的な業務スタイル」であり、かつ「片手間にできる簡単な仕事」というイメージも強く、それだけで生活していくのは無理があるという印象であった。しかしかのコロナ禍によって、個人のスキルや社会的立場に関わらず、世界中の人々が否応なく一斉に在宅で仕事をしなければならないという特殊な状況が発生したことにより、汎業界的

にテレワークのあり方やその価値が見直される流れとなった。

テレワークを実施するにあたり、懸念されるデメリットとしてよく言われるのが、情報漏えいのリスクやウィルス感染への危惧、また労働管理の難しさ、チーム内のコミュニケーション不足、そして個々人のスキルアップの鈍化などである。しかしながらこの場合、最初から各自の持つスキルおよび専門分野を活かしての共同研究プロジェクトであるため、ほぼオンラインのみであっても分業・協働が比較的スムーズにいくパターンであると考ええる。また、オンラインGISというセキュアな限定グループの場をあらかじめ用意した上でのデータ共有が可能なことは、一般的なテレワークと比べ有利な条件であるといえる。

研究プロジェクトひとつとっても、計画策定から日程・予算等の調整、現場での調査、調査結果データの管理、解析作業、結果のまとめと原稿や図版作成、そして公開発表とさまざまな段階がある。プロジェクト全体の進捗の効率化や省力化を図るためには、全員がそれらすべての段階を通しておこなってから持ち寄るのではなく、当初から適切な分業・協働体制が敷かれていることが望ましい。GISというツールを介したオンライン共有を利用したプロジェクト実行が、実際にはまだこれからの試みではあるものの、今後の研究事業の発展に役立つ良い例となるよう願っている。

※1 国土交通省・GISとは

[https://www.mlit.go.jp/tochi\\_fudousan\\_kensetsu\\_ugyo/chirikukannjoho/tochi\\_fudousan\\_kensetsu\\_gyo\\_tk1\\_000041.html](https://www.mlit.go.jp/tochi_fudousan_kensetsu_ugyo/chirikukannjoho/tochi_fudousan_kensetsu_gyo_tk1_000041.html)

※2 OneGeology

<http://portal.onegeology.org/OnegeologyGlobal/>

※3 GEOCATMIN

<https://geocatmin.ingemmet.gob.pe/geocatmin/>

## ●見える？見えない？研究現場の不均衡

瀧上 舞（国立科学博物館）

「なぜ日本人の論文は9割が男性なの？」  
「日本人女性は結婚したら研究をやめるからでしょ？」

これは2017年にアルゼンチンで開催されたワークショップで投げかけられた質問と、その隣にいた友人の発言である。この会話に私は答えるすべがなく、言葉に詰まってしまった。なにも説明できず、ただ「しまった！」という感情を抱いたことを覚えている。

もちろん分野による傾向の違いもあり、著作をもつ諸姉の顔も次々に浮かんだものの、この問いかけをした友人たちは自然科学系論文も人文社会科学系論文も比較的幅広く読む分野の専門家である。その海外研究者たちによる意見は衝撃であった。もしも、この発言が男性ならば、それはアンコンシャスバイアスで見ようとしていないだけだと反論もできただろうが、私と変わらない世代の女性研究者からの指摘にはどう反論したものかと迷っているうちにこの話は流れてしまった。あれからずっと、海外の方々から見て日本の研究者たちはこのように受け止められてしまっているということを常に意識している自分がいる。

### 論文数の男女差

全分野における論文数の男女別統計で、日本では1990年から2020年の間の30年間に発表された論文のうち、女性の筆頭論文は17.1%だったという報告がある(Nakajima et al., 2023)。2020年だけみても、日本の女性筆頭著者は全体の22.2%であり、30年で5%伸びただけである。私が指摘された1割というほど低くはないものの、2020年の世界平均では45.4%であり、実際に日本人女性研究者の論文比率は世界的に見て低いといえる。その要因として女性は総生産性が低く、キャリアの長さが短いことが指摘されている。また、同報告では、「男性研究者は男性の論文を引用しがちである」というデータも示している。これにより、女性研究者の存在は益々見えにくくなってしまおうという負の連鎖が生じている。

なぜそうなるのかと言えば、心当たりは山ほどある。日本ではとりわけ女性が家庭内ケアに努めることが多いという社会的背景や、日本経済の不況による就職難など、様々にあることはここで議論するまでもないだろう。個人的に感じているのは、家事育児負担の不均衡だけではなく、体力的不利の影響である。ホルモンバランスの変動や気象変化に影響されて定期的に体調を崩しがちであるし、出産で健康も損なわれてしまう。共同研究者の方々によくご存知だが、私も頻繁に寝込んでいる。PMS（月経前症候群）、生理痛、低血圧、片頭痛、気象病、胃腸虚弱等々、元気な日なんて月の半分もあればよい方で、睡眠時間を削って仕事をすればすぐに倒れてしまう。日本の研究環境の多忙さは男性においてもハードだと言われるなかで、研究に割ける時間も体力もない女性研究者が成果をだしていくのはとても厳しいと言わざるを得ないだろう。

しかしこれは、突き詰めて考えれば、女性に限らない問題だと思っている。育児への積極的参加により男性も産後鬱ならぬ育児鬱になりかねないという報告や、近年指摘され始めた男性の更年期障害の存在、体力の後退期にある中高年研究者が親の介護と研究を両立しなければいけない状況、医療の発達により様々な病を抱えながら研究を続ける研究者など、誰にとっても100%全力投球できる環境を維持するのは難しく、ワークライフバランスの問題はこれから益々顕著になることが予想される。私のような体調不良になりやすいメンバーが存在することで、身体の弱い人間でも研究を続けられるような環境を構築することができれば、いろいろな課題を有する研究者が参画できるようになるのではないだろうか。まだ試行錯誤ではあるが、様々な立場からのプロジェクトへの参加や、無理をしない調査計画の立案を心掛けるなど、多様な現場を目指している。

### 学会や研究集会での不均衡

最近、国内の学会やシンポジウムなどに参加すると、男性の多さがとても気になるようにな

ってきた。海外の研究集会では驚くほど女性が多い。冒頭の質問をされたワークショップの集合写真を数えてみたところ、女性が 22 人、男性が 16 人であった。私の参加する分野は、南米では特に専門家として活躍している方々の年齢層が高くないということもこの性別のバランスに影響している可能性もあるが、それにしても過半数が女性という状況は日本の会議やシンポジウムではまずありえないだろう。日本で私が参加する分野の研究会やシンポジウム等では、だいたい女性は参加者の 10~20%程度であり、上述した論文筆頭著者の割合と一致していた。ぜひ皆様もお手元の集合写真を数えてみて欲しい。

さらに言えば、集合写真の最前列や中央付近の性別も偏っていることが多い。中央付近に写るのは登壇者が多いことを反映しており、登壇者の性別の偏りは女性の身ではかなり気になっている。それを指摘すると「気が付かなかった」と言われることもあるのでさらに驚かされる。これもまた、オーガナイザーが男性のみの場合は女性講演者の割合が下がると報告されている (Homma et al., 2013)。

コロナ禍以降はオンラインとのハイブリット開催も多く開催されるようになっており、参加していても現地での集合写真に写れないケースもあるだろう。ハイブリット開催に様々なメリットがあるのはよく理解しており、私も何回もその恩恵にあずかっている。今後も、おそらく家事・育児で忙しい女性による利用が進むことが予想される。しかし、利用が増えることでこうした写真記録に女性参加者が写らないという状況が加速されて、ますます学術界の女性像が見えにくくなってしまい、将来的に不利益を生むのではないかと案じたりもしている。オンライン参加をする女性研究者は積極的な発表や発言で存在を示していく必要があるのかもしれない。

### 託児室は必要か？

女性が学会や研究集会に頻繁に参加できない問題の解決策のひとつとして一般的になってきたのは託児施設の設置である。大手の学会は託児室を設けることが一般的になっており、懇親会にも同伴できるように配慮されている。私

も託児室が設置されている日本人類学会の大会には子供同伴で行くようにしている。

しかし、託児室があるからといって大喜びかと言えばそうではなく、実際には不利なこともたくさんある。幼児を連れての二次会参加は難しく、また子どもを連れての移動は非常に不便で面倒くさい。直前まで発表準備に追われている時には、時間がとれずに泣きたくもなる。本音を言えば、連れ行かずに羽を伸ばして、好きなだけ食べて飲んで意見交換をして、ついでに移動中や宿でも仕事を進めたい！のである。

もちろん良い点もある。子育て世代同士で話が弾むこともあり、研究で一緒にしない方ともご縁ができたりする。きっとこの仲間意識は子供が成長しても続くのだろう。

子供と一緒に旅行できるのも良い点のひとつと言える。会議や調査、実験で頻繁に留守にする母に、子供はだいぶ我慢をしてくれているようである。平日は 10 時間も保育園に預けられ、土日になれば母は留守では寂しいだろうし、一緒に仕事に行きたいと泣かれて良心が痛むこともある。そんなとき、土日の仕事先に子どもを連れていければと思ったりする。

予算的な問題や事務的手続きの問題から、設置することの難しさはよく理解している。せめて自身が主催する研究会ではできるだけ設置して、意識の育成と設置方法の共有だけでもできるようにと考えている。多様性を尊重するならば、理想的には 1 人でも必要とする人がいれば用意できる環境が続いて欲しいと願っている。

### 男女共同参画学協会連絡会

昨年、男女共同参画学協会連絡会 (<https://djrenrakukai.org/index.html>) という科学技術系の学会・協会が学術界の多様性推進のために連携協力を行う組織のシンポジウムに参加した。108の自然科学系学協会が正式加盟し、11学協会がオブザーバーで参加している。ひよんなご縁で「フィールドワーク分野のダイバーシティとインクルージョン～誰もが能力を発揮し輝くために～」というテーマのシンポジウムにお声がけを頂き、登壇させて頂いたものである。ここでは他学会・協会の様々な取り組みについても紹介されており、学会員からどのような要望があって、どう応えていくのかという事例の参

考にもなった。例えば、日本生理学会ではライフイベント支援として、大会での託児室設置だけではなく、大会期間中の託児費用・介護費用・家事代行サービス費の補助や、未就学児を同伴する場合の旅費まで補助が出るそうである

(<http://physiology.jp/committee/29886/>)。

ちなみに、人文社会科学系には GEAHSS という人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会が存在しており、全 72 団体が参加している (<https://geahssoffice.wixsite.com/geahss>)。研究者は複数の学会に所属していることが一般的であり、いずれかの所属先がどちらかの連絡会に参加していれば、これらの組織の存在をご存じだったかもしれない。私はたまたま所属する 3 つの学会がどちらにも参加していなかったため、昨年まで存在を知る機会がなかった。

これらの連絡会に加盟すると学会・協会と連絡会を繋いで情報交換をする業務が必要なため、少ない役員で時間がない中で必死に業務を回している状況では、気軽に参加することは難しいのだろう。とはいえ、他学会がどのような取り組みを行っているのかを知るのは重要である。これはいわば企業の福利厚生のようなもので、学会発表をするならより充実した補助のある場所で行いたいと考える研究者も出てくるだろう。将来の学生・若手研究者たちが古代アメリカ学会の取り組みをみて、この分野では多様な働き方ができなさそうだと判断して忌避されてしまうようではあまりに惜しい。後進に姿勢を見せるためにも、定期的に情報収集や意見交換をする場を設けていくことが必要ではないだろうか。この特集記事もそのような一助になれば幸いである。

## まとめ

近年の研究者周りの働き方は昔以上にハードになっていると思う。私の父も大学教員であったが、「今の研究者は気の毒だ。いまの時代なら到底やっていけなかった。子供も 3 人は育てられなかった。」と言っている。

労働人口が減り、女性の社会進出/男性の家庭進出が急速に進む中で、日本のアカデミック分野は異様ともいえる男女の偏りが可視化されている。どうしたら研究現場の多様性を確保していけるのか、現実的で即効性のある方法はわからない。あれもやりたい、これもやりたいと希望を述べれば、理想論を言うなどお叱りの声もあるだろうが、声をあげなければ現状維持を黙認されてしまうだろう。試行錯誤しながら、私自身が先行事例のひとつになれるよう努めたいと考えている。

## 参考文献

- Homma et al., (2013) “Maximizing the Potential of Scientists in Japan: promoting equal participation for women scientists through leadership development.”, *Genes to Cells* 18, 529-532.
- Nakajima et al. (2023) “Quantifying gender imbalance in East Asian academia: research career and citation practice.”, *Journal of Informetrics* 17, 101460.

## ●女性研究者の結婚・出産・育児

久保山 和佳（日本学術振興会 特別研究員 PD・東北大学）

### キャリアアップと結婚・出産適齢期

私は、ある考古学者が書いた新聞記事をきっかけに考古学に興味を持ち、研究者になりたいと考えるようになった。その一方で、当時スペイン語学科の学部生だった私は、就活をするか修士課程に進学するかで迷っていた。「将来の女性としてのライフプランを考えると、研究者は厳しい世界なのではないか」といった漠然とした不安があったからだ。周囲に考古学を学ぶ人がいなかったため、修士課程進学前に考古学関係の学会や講演会に参加し、情報収集をした。そこで、自分が考古学に興味を持つきっかけとなった研究者が、結婚して海外で博士号を取得し、休日の学会や講演会には家族を同伴して家庭と研究を両立していることを知った。私にもそんな風に、研究と私生活を両立することができるのではないかと感じた。

修士課程終了後は、イギリスのサウサンプトン大学の博士課程に進学し、在学中の 2021 年に夫と入籍した。大学の研究室には子育てをしている研究者が多く在籍しており、泊まりがけの発掘調査には教員も研究者も子供を連れてきていた。また、国際学会などの海外出張でも配偶者や子供を連れてくる研究者に多く出会った。家族同伴が当たり前の環境であれば、研究と家庭の両立も難しくないと感じた。

私は 2022 年に博士課程を修了し、卒業後すぐに東北大学で学術研究員として 1 年の任期付で採用された。幸い、夫は仕事をリモートワーク中心に切り替えてくれたので、夫婦で仙台に引っ越した。任期が 1 年であったため、赴任しただちに翌年のポスト探しに明け暮れていた。この時私は 29 歳で、研究者としてこれからキャリアが始まる時期が出産適齢期と重なることに気がついた。今後も任期付きの職を転々とする可能性が高い状況で、自分のライフプランを優先すべきか悩んだ。いつになるか分からない安定したポストに就くまで数年待つべきなのか。これは多くの女性研究者が悩むことではないだろうか。私は悩んだ末、今はキャリアより私生活を優先することにした。

### 妊娠・出産・育児と研究の両立

2023 年 5 月、仙台に赴任中に娘を出産した。研究の一時中断も検討したが、出産当時の雇用形態では育休手当がもらえない状況であった。また、同年 4 月から日本学術振興会の特別研究員 PD（以下、学振 PD とする）に採用され、妊娠以前に応募していた研究助成も採択されたため、研究を中断するのが惜しく、育休を取らずに継続することに決めた。

前述の家庭と研究を両立している研究者達は、そのほとんどが男性であったが、このご時世、男女の差はそれほどないだろうと考えていた。しかし、実際に妊娠・出産・育児を経験すると、理想と現実とのギャップに驚かされた。女性は妊娠初期から業務上の制限がかなりある。初期は悪阻が酷く、研究室で作業をしても集中できないことが多かった。学術研究員として在籍していた時は、本来は私の仕事であった海外研究者の空港へのお迎えや発掘実習の引率などができなくなり、申し訳ない気持ちになった。自身の研究では実験考古学の手法を取り入れているが、お腹が大きくなってくると身動きが取れず、作業が先延ばしになってしまった。また、妊娠中は海外調査に行けず、国内でできることを地道にこなすしかなかった。出産前から常の通り研究ができない期間があるという点で、男性研究者との差があるようでもどかしかった。

育児が始まると、自分の時間を作るのがとても難しく、娘が寝ている間に作業をするしかなかった。特に、日中の授乳と夜間授乳は私にとって大きな障害となった。母乳を作るために血液が脳まで回らず、貧血状態が続いた。また、夜間授乳で夜通し寝られることがなく、常に寝不足であった。そのため、日中に研究を進めようと思っても集中力が維持できない。この頃の私は、出張や体を動かす作業が難しかったため、書籍の出版準備や投稿論文の執筆に励んでいた。しかし、その頃の執筆物を読み返してみると、分析結果や議論の熟考ができておらず、文章だけでなく図版のミスも目立つ。

娘が保育園に入園するまでの 10 ヶ月間は、

自宅保育をしながら研究を進めた。出産前は、すぐに保育園に預けようと思っていたが、そう簡単に保育園の空きは出ない。娘ともっと一緒に居たいという気持ちもあった。学会発表や実験などの手が離せない作業の際には、ベビーシッターを頼んだり、実家から母を呼んだり、周囲に頼った。預け先がなかなか見つからず、Zoom ミーティングや発表の際に娘を抱いて参加したこともあった。一方で、オンライン参加の選択肢が無く、欠席した会議や学会も多くあった。コロナ禍が落ち着き、学会や会議の対面開催が増えているが、オンラインとのハイブリット開催があれば、今後も育児をしながら自宅から参加できる。

娘がハイハイをするようになると、起きている間は目を離せないの、寝かしつけ後に研究時間をとっていた。学振 PD は裁量労働制で、働く場所も時間も選べるので、自分のペースで研究を進められ、育児との両立をしやすい。しかし、その両立に固執するあまり、休息が取れず、体調を崩したことも何度かあった。



写真1 資料の顕微鏡観察を見守る娘

### 子連れ出張に挑戦

仕事や出張に子供を連れて行くことが当たり前になれば、育児との両立が可能になるだけでなく、周囲の意識も変化するのではないかと考える。東北大学のダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン (DEI) 推進センターでは、子の出張帯同費用やベビーシッター費用の負担制度がある。育児における負担がゼロになることはないが、家族との時間も大切にしたい私は、積極的に子連れ出張をしている。産後初めての

出張は、娘が9ヶ月の時に2週間コスタリカへ調査に行った。0歳児の初海外に備えて、新生児の頃から現地で困らないよう、準備をした。夫には休暇を取ってもらい、コスタリカで娘の世話は夫が担当した。また、初めてワンオペ育児に挑戦する夫の助けになるよう、現地の知り合いにも協力してもらった。普段と立場が逆転して育児を経験したことで、夫にも意識の変化があり、その後の育児に積極的に取り組むようになった。私は現地調査での限られた時間を有効に使うため、以前に比べてかなりの下準備をして調査に臨んだ。周囲の協力もあって、短期間で良い研究成果を得られ、現地でシンポジウムでの発表も果たせた。

学振 PD としての初年度は、娘がまだ保育園に入園前だったので、平日の国内出張や研究室訪問にも連れて行くことがあった。普段は神奈川県の実家で研究をしているため、所属先の東北大学へも出張に行くことがある。動きたい盛りの娘との新幹線乗車は想像以上に大変で、一泊の出張でも酷く疲れた。子連れ出張をしていると「小さい頃から連れ回されて可哀想」「自分のキャリアを優先したのか」と人に言われることもあるが、娘は色々な場所に行けて、色々な人に会えるので、いつも楽しそうにしている。刺激をたくさん受けて、出張の度に成長しているようにも感じる。大変ではあるものの、出張等があっても家族と過ごす時間を確保できるので、私は満足している。

### これからのキャリア形成

現在私は第二子を妊娠中で、学振 PD の2年目になる2024年の冬に出産予定だ。子供が2人いる中で研究は未知の世界だ。第一子だけの時と同じようにできるとは思えない。そのため、第二子の出産後は、育休として学振 PD を一時中断することになるだろう。任期の後半で休暇を取ることに不安はあるが、長期の海外出張に行くことが困難な状況下では、PD としての研究が進まないため、無理に復帰することは得策ではない。

最近では、学振でも出産・育児に関する支援が充実していて、普通の会社員と同じように育休が取れる制度が整っている。しかし、多くの女性研究者は、出産・育児による休暇を取らずに



研究を続けたいのではないだろうか。なぜなら、産前産後休暇が終了しても、育児が終了するわけではなく、状況は変わらない。任期がある身で休暇を取ることにも不安がある。研究費の獲得や研究職への復帰を考えると、育児のためであっても、長期間休んでいられない。特に若手は、研究を続けなければ少しでも多くの研究業績が必要だというプレッシャーがある。そのため、育休を取らずに研究を続けるための支援があればもっと両立がしやすくなると考える。

女性研究者が育児をしながら研究を続けるには、周囲の理解と協力が必須である。家族だけでなく、研究室や大学、他の研究者の理解も必要になる。女性研究者のキャリア問題は、もはや女性だけの問題ではなく男性を含む社会全体の問題だと私は捉えている。近年では、大学や

研究所の研究者採用における男女差別はほとんど存在しないだろう。そのため、研究業績が採用時の客観的判断基準になることは明白である。そのために、多くの女性研究者は無理をしているのではないか。

ロールモデルとなる女性研究者が沢山居れば、これから考古学を志す女子学生の希望になると考える。女性研究者が出産・育児により研究を中断した場合と、継続した場合の両方のキャリア形成を出産前に知る機会があれば、選択肢が広がるのではないだろうか。また、学会や会議のオンライン・対面ハイブリット開催を継続することで、異なる環境下の研究者が無理なく参加できる。このようにして、研究現場でもダイバーシティに対応して行く必要があると考える。

## 自 著 紹 介

### ● 『景観で考える：人類学と考古学からのアプローチ』

(河合洋尚・松本雄一・山本睦編、臨川書店、2023年12月刊、4,400円＋税)

松本雄一（国立民族学博物館）、山本睦（山形大学）

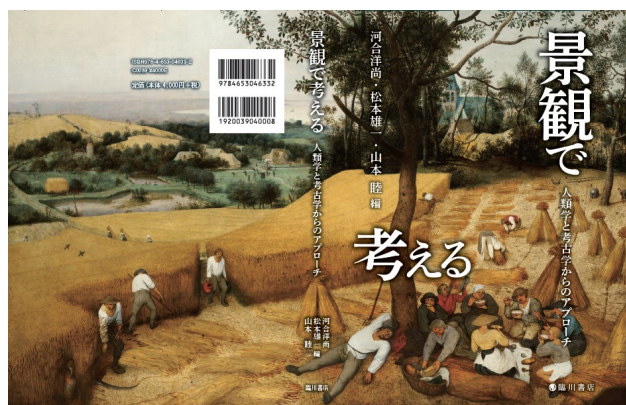


写真 1 表紙と裏表紙

本書は、2019年度から2023年度にかけて実施された、文部科学省研究費助成事業・新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類学—文明創出メカニズムの解明」（以下、出ユーラシア科研）の研究成果として出版された。この学際的なプロジェクトには、多数の本学会員が参加し、古代アメリカという枠組みを超えて大きく寄与した。そのような成果の一環として位置づけられる本書は、人類学と考古学において重要な概念と長く言われてきた景観をめぐる論集である。そのため、厳密には「古代アメリカ文明の本」とは言えないかもしれない。しかし、共編著者3名のうち2名が、執筆者12名のうち5名が、本学会員である。ここからも分かる通り、本書において新大陸の社会は極めて重要な事例として扱われており、多くの学会員が共有する問題を対象としたものであるといえるだろう。

ここで本書の成り立ちに関して、若干補足しておきたい。実は本書のアイデアが生まれたのは10年以上前のことである。編者である筆者たちと河合洋尚氏は、当時、国立民族学博物館において機関研究員として在籍する同僚であった。その時からすでに、日本における景観人類学のパイオニアとして知られていた河合氏は、欧米における景観考古学の動向を知悉しており、その論考には筆者たちの知る多くの考古学者が引用されていた。中国南部の現代社会を主なフィールドとする人類学者である河合氏と古代ア

ンドスを専門とする筆者たちとの間に、思わぬ形で共通の関心があることが分かったのである。こうして、河合氏との（主に酒場での）対話を繰り返す中で、将来的に人類学と考古学を橋渡しするような論集をつくるというアイデアがいつの間にか生まれることになった。出ユーラシア科研では、編者たちはそれぞれ異なるテーマを掲げた班に属していたが、分野や班をまたいだ研究が推奨される中で、筆者たちは10年以上前から温めていた上記のアイデアを実行に移す機会を得ることになったのである。

本書は三部構成となっている。第I部に先立つ序章では、景観研究をめぐる学説史が人類学と考古学を絡み合わせた形で行われる。それを受けた第I部では、景観概念の活用の可能性が、その多様な理論的枠組みを踏まえて展開される。そして、第II部と第III部で、過去の社会を対象とする考古学と現代社会を対象とする文化・社会人類学における事例研究が取り上げられる。

執筆者のうち本学会員はアンデス研究者4名、メソアメリカ研究者1名である。以下に会員が執筆した章に関して簡単に紹介しておきたい。

荘司一歩会員が執筆した第3章は、ペルー北海岸に位置する紀元前4000年前後の先土器時代のマウンド遺跡に焦点を当てている。集団によって繰り返される実践としてのマウンド・ビルディングが、人類学者ティム・インゴルドの唱える「行為中心の景観概念」を導入して考察される。そして、マウンド・ビルディングが、様々な物質の時間性を取り込み、過去の活動と集団を関連付けて例示するような進行形としての景観生成のプロセスであると位置づけられる。

松本雄一による第4章では、ペルー中央高地南部に位置する形成期中・後期（前1000～前500年）の神殿カンパナユック・ルミ遺跡を対象として、自然地形が人為的に改変されることで神殿が出現し、変容していく過程が論じられる。神殿の変化が、異なる時間性を有するモノとヒトのエージェンシーが絡み合って景観に表

れる過程として描き出されており、行為理論としての景観概念に人類学における物質性研究と実践理論を組み込むことが試みられている。

続く第5章では山本睦が、ペルー北部のワンカバンバ川流域、とりわけ同流域内における形成期の中心であったインガタンボ遺跡のデータを用いて、過去の社会の実践や記憶が地域や場所に固有の歴史過程を生み出すことを論じる。豊かな通時的変化（前1200年～後1500年）のデータを背景に、神殿と周囲の景観という物的痕跡を、自然 vs 人工という二項対立でとらえる視座を批判し、人々の実践や認知とかかわる記憶との関係のなかで動的にとらえる試みが示される。

市川彰会員による第6章では、中米エルサルバドルのサン・アンドレス遺跡（前600年～後1200年）の事例を用いて、大型建造物を含む景観の生成と変化が論じられる。本論における鍵は「火山灰」である。火山噴火が頻発する環境において、火山灰と大型建造物の創出、日常生活の変化との関係が、近年人類学と考古学の双方で注目されているアセンブリッジの概念を用いて記述する試みが提示される。

古川勇氣会員が執筆した第11章は、インゴルドが提示したイマジネーションの概念を手がかりに、ペルー北部カハマルカ州の事例から物質と精神性をめぐる議論が展開される。山の形状と住民の山での経験が関わり合い、住民が山をめぐる一定のイマジネーションを形成していることを指摘し、そのうえで、暗闇という状況において、そうしたイマジネーションがいかに関現出するかが論じられる。

いずれの章においても、景観概念をめぐる近年の理論的視座を導入することが試みられており、学会誌に投稿される論文に比べて解釈の面で「冒険」もみられる。编者としては、人類学者と考古学者が共通の概念を用いて対話することを目指した本書が、教育の現場で活用されることを切望する。

本書は、出ユーラシア科研のB01班、A01班、A02班からの助成を受けて出版されたものである。以下にそれぞれの課題名と課題番号を記して感謝申し上げたい。

「出ユーラシアの統合的人類学：文明創出メカニズムの解明」（課題番号：19H05731）（領域代表

者：松本直子）

B01班：「民族誌調査に基づくニッチ構築メカニズムの解明」（課題番号：19H05735）（代表者：大西秀之）

A01班：「人工的環境の構築と時空間認知の発達」（課題番号：19H05732）（代表者：鶴見英成）

A02班：「心・身体・社会をつなぐアート／技術」（課題番号：19H05733）（代表者：松本直子）

## <目次>

序章 人類学と考古学の景観論—その研究動向と課題（河合洋尚・松本雄一・山本 睦）

第I部 景観という視座

第1章 「景観を」ではなく「景観で」考える—交差点としての景観研究の布置（大西秀之）

第2章 現代人類学で景観を問う意義を考える（河合洋尚）

第II部 環境・記憶・モニュメント：景観で考える考古学

第3章 景観で考えるモニュメンタリティー—ペルー北海岸のマウンド・ビルディングを事例に（荘司一歩）

第4章 自然地形から神殿へ—アンデスの神殿を景観から考える（松本雄一）

第5章 景観をめぐる時間の多様性—繰り返しかえし築かれ、利用される神殿（山本 睦）

第6章 火山灰が創る景観（市川 彰）

第7章 絡み合いの景観論—祭祀景観をめぐる民族考古学的試み（山口 徹）

第8章 考古学における景観概念を捉えなおす—「景観」概念の整理と方法論的課題（寺村裕史）

第III部 認知・言説・マテリアリティ：景観で考える人類学

第9章 霊性との呼応から創出される景観—ラオス南部の水辺集落における浄化儀礼から考える（清水郁郎）

第10章 景観の物語を語る—住まうことの重層性（後藤正憲）

第11章 景観とイマジネーション—ペルー北部山村の暗闇における不可思議な体験談から（古川勇氣）

第12章 視覚イメージと言説実践—神戸南京町の景観形成をめぐる（辺 清音）

あとがき（河合洋尚・松本雄一・山本 睦）

索引

## ● 『インカ帝国 歴史と構造』

(渡部森哉、中央公論新社、2024年5月刊、2400円+税)

渡部 森哉 (南山大学人文学部)

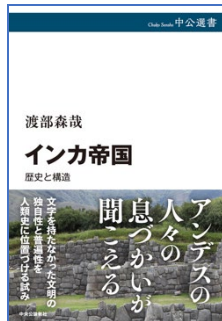


写真1 表紙

日本アンデス調査 60 周年記念シンポジウムが 2018 年 12 月 22 日に開催された。その後のパーティーの席で、中央公論新社の宇和川準一さんからインカ帝国について一般書を書いてみないかとお声がけいただいた。あれからずいぶん時間が経ってしまったが、ようやく出版された。なお中央公論新社からは『アンデス古代の探究——日本人研究者が行く最前線』(2018 年)もでている。

一般書ということで、できるだけ分かりやすく書く必要がある。しかし、結果的にずいぶん専門的になってしまった。

インカ帝国についての本は、実はそれほど多くはない。泉靖一『インカ帝国』(1959 年)は先スペイン期の全時代を扱っているため、インカに関する部分は一部分だけである。本一冊をインカ帝国に当てている日本語の本として、ピース&増田『図説インカ帝国』(1988 年)がある。他に翻訳本としてロストウォロフスキ『インカ国家の形成と崩壊』(2003[1988]年)がある。また論文集として島田&篠田(編)『インカ帝国 研究のフロンティア』(2012 年)もある。増田義郎の名著『インカ帝国探検記』(1961 年)、『太陽の帝国インカ』(1964 年)、あるいは染田秀藤『インカ帝国の虚像と実像』(1998 年)はクロニカに依拠したスペイン人側の視点に着目したインカ帝国の研究書である。

インカ帝国の全体像を理解するための日本語の本がほとんどなかった。もっとも英語の本でもインカ帝国に関する総論はなかなかない。島

田泉はインカ帝国の適切な教科書を探したけれども見つからなかったことを『インカ帝国 研究のフロンティア』を編集した動機としてあげている。

各地で進む発掘調査のデータをまとめて、クロニカと照らし合わせれば他の本とは少し違ったインカ帝国についての本が書けるかもしれない。しかしそうした手法を採用しなかった。

結果的にクロニカなどの文書を中心としてインカ帝国を描きだし、その中で考古学のデータをどのように解釈すれば良いのかを考えた。そして類書を参考にしつつも、それらとは異なった構成を採用した。現代の既存の枠組に落とし込めて解釈するのではなく、先住民の視点に近づけて解釈しようと試みた。そのため章立てには、政治、経済、文化、宗教、といったケチュア語にはない概念を用いなかった。代わりに、ケチュア語にある言葉で説明をしようとした。その結果、次のような章立てとなった。

- 第 1 章 結ぶ、書く、解く
- 第 2 章 パチャ 時空間
- 第 3 章 歩く、運ぶ
- 第 4 章 作る 物質と儀礼
- 第 5 章 治める、継ぐ
- 第 6 章 分ける、合わせる
- 第 7 章 戦う

アンデスの気候を記述するのにケッペンの気候区分が用いられることはほとんどなく、ハビエル・プルガル・ビダルの 8 つの環境帯に区分する枠組が基本的に用いられる。その手法は民俗分類 (folk taxonomy) と呼ばれる。本書の内容も民俗分類に基づくインカ帝国の実体研究と言えるかもしれない。

執筆前の 2019 年 9 月に企画書と目次案を中央公論新社に送ったが、その時の案も 7 章構成であった。それから変更なしで書き上げた。

第 1 章はキープについて、そしてその情報を基にして書かれたクロニカについて、またクロ

ニカを基にしてインカについて研究することについてである。本書は考古学データを中心的には用いないので、この部分が方法論について解説した章になる。

第2章はアンデスにおける時間と空間の概念についてである。キープについては議論が重ねられているが、音を表す記号ではないため文字ではない。そのため、インカをはじめとするアンデス社会は無文字社会であると言える。インカの人びとが時間と空間をどのように認識していたのかについて考察した。

第3章は人々と物資の移動についてである。インカ帝国の範囲内には様々な遺跡が残されている。そして土器をはじめとする工芸品がその範囲で見つかる。それは人間が移動した結果である。大型動物に車輪を牽かせる、あるいは大型の船で大量の物資を運搬することのなかったアンデスでは移動と運搬は徒歩が基本であった。

第4章は物質文化の分類についてであり、第5章は人びとの分類についてである。

第4章では、インカ帝国の物質文化について解説した。インカ帝国の範囲内に遺跡が分布し、それらをインカ文化のものと我々は判断する。ではインカの人びとにとって、何かを物質で作るといことはどのような意味があったのか。カマイという概念を手がかりに考察した

第5章では、インカ王が臣民を統治する方法、そしてインカ帝国を構成する人びとの役割についてである。南米最大の規模の古代国家インカは無文字社会であったが、どのように人びとをまとめ上げたかについて考察した。

第6章は、分類という基本的な認識についてである。人間はいかなる文化においてであっても、対象を分けて情報を整理する。そうした分け方には文化によって癖があるが、分けること自体は普遍的な特徴である。そして分けたものをどのように組み合わせるのか。インカの分類の方法について考察した。

第7章は、戦うことについてである。インカ帝国はスペイン人侵入時も拡張の途中であった。インカ王は征服活動を続け、戦闘の先陣にたった。なぜ戦争を続けたのか、そしてなぜ戦争をやめなかったのか。戦うことの意味について考えた。

長い文章を書く際は、先に構成を決めて、できるだけ短期間に書き上げるのが望ましい。しかし構成を先に決めたものの、結局、短期間に書き上げることはできなかった。

本書を書くために一番時間がかかったのは、ケチュア語の辞書を読むことであった。インカ研究には、サント・トマス（1560年）、無名作者（1586年）、ゴンサレス・オルギン（1608年）の3冊のケチュア語辞書が主に用いられる。これらの辞書を調べるのに利用したのではなく、線を引きながら全て読んだ。そうすることによって、インカの人びとが用いた言語の全体像を把握しようとした。社会、文化、宗教、などの言葉は辞書にない。そうした言葉を用いずにどのように説明したら良いのかを考えた。結局、そうした概念を用いずに本を書くことは不可能であったが、当初の意図を尊重して章立てには用いなかった。執筆中はできるだけアンデスの人びとに寄り添うことを心がけたが、私には難しかった。本書が新しい研究が生まれる踏み石にでもなったならば良いかなと思っている。

インカ帝国の時代に話されていたケチュア語は基本的に失われた言語である。ケチュア語には多様性があり、現在のケチュア語はインカが用いたケチュア語とは別の方言である。インカに関する文書に現れるケチュア語は辞書をしつこく調べるしか方法はない。辞書を引けば簡単に意味を知ることができると思い込んでいたが、そうではない。ケチュア語の解釈が変わっていくので、それまでの説も変わっていく。セサル・イティエルの著作を読んで、そのことに気づかされた（Itier 2023 *Palabras clave de la sociedad y la cultura incas*）。執筆が遅れた結果、イティエルの本を参考にできたことは幸いであった。

執筆の際にはかつて読んだインカ帝国に関する多くの本を再読した。再読の際は記述の1つ1つの根拠となるクロニカの記述はどこにあるのかに注意した。今後の研究のための便宜を図るつもりで、一般書ではあったがクロニカの記述をできるだけ詳細に引用した。

残された課題は多い。1つはインカの考古学的なデータについて考察することである。先インカ期からの流れにのせて解説した方が良くであろうと考えている。将来の課題である。

● 『古代アメリカ文明 マヤ・アステカ・ナスカ・インカの実像』

(青山和夫編著、井上幸孝・坂井正人・大平秀一著、講談社現代新書、2023年12月刊、1200円+税)

青山 和夫 (茨城大学)

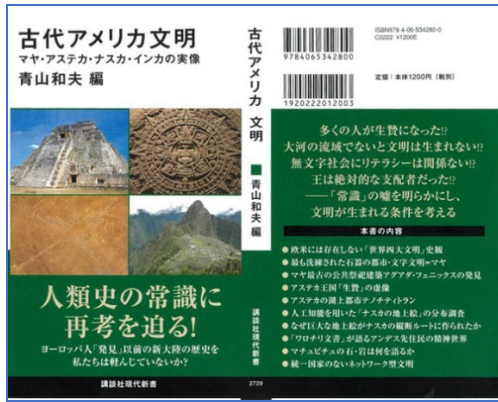


写真1 表紙と裏表紙

本書は、メソアメリカ文明とアンデス文明を一緒に解説する日本初の新書である。ただしアメリカ大陸の多様な先スペイン期社会を網羅するのではなく、メソアメリカを代表するマヤとアステカ、アンデスで最も名前が知られているナスカとインカの最新の研究成果や魅力を詳しく紹介して実像に迫る。内容としては、文部科学省の科研費新学術領域研究の助成による「古代アメリカの比較文明論」プロジェクト(平成26~30年度、領域代表者:青山和夫)の成果の一部に、その後の研究で得た新知見を加えた。プロジェクトに参加した4人が、それぞれ自らの研究成果や現地の経験を織り交ぜながら平易な表現を心がけた。目次は、以下の通りである。

序章 古代アメリカ文明—メソアメリカとアンデス 青山和夫

第一章 マヤ文明—マヤ文字・神殿ピラミッド・公共広場 青山和夫

- 1 ネットワーク型文明—マヤ文字と図像を読む
- 2 神殿ピラミッドとマヤ人の世界観
- 3 「語り」と「見せる」—公共空間のなかのマヤ文明

第二章 アステカ王国—テノチティトランのモニュメントと絵文書を読む 井上幸孝

- 1 アステカ王国の実像
- 2 絵文書からアルファベット文書へ
- 3 後世に伝えられたアステカ王国

第三章 ナスカ—地上絵はなぜ制作されたか 坂

井正人

- 1 文字と書きもの
- 2 ナスカ社会とは
- 3 地上絵と古代ナスカの人々—広大なナスカ台地を探る

第四章 インカと山の神々 大平秀一

- 1 インカ社会と人々
- 2 アンデスの精神世界
- 3 インカの祭祀空間

終章 古代アメリカ文明の実像に迫る 青山和夫

参考文献

あとがき 青山和夫

序章では、いわゆる「世界四大文明」が学説ではなく、江上波夫が普及させた教科書用語であることを明示する。メソアメリカとアンデスという古代アメリカの二大一次文明の研究は、旧大陸や西洋文明と接触後の社会の研究だけからは得られない新たな文明史観や視点を提供して、西洋中心史観や旧大陸のいわゆる「四大文明」中心的世界史の脱構築につながる。

第一章では、公共広場と公共祭祀建築からマヤ文明の起源と形成をみていく。マヤ文明最古かつ最大の公共祭祀建築が見つかったメキシコのアグアダ・フェニックス遺跡の最新の調査成果についても紹介する。マヤ文明では、神々の意思が尊重される世界の中で、支配層と民衆のせめぎ合いが社会を動かす仕組みを更新させていった。先古典期中期(前1000~前350年)に公共広場で繰り返し行われた公共祭祀という反復的な実践は、集団の社会的記憶を生成して、中心的な役割を果たす支配層の権力が時代とともに強化された。

先古典期後期(前350~後200年)には、公共祭祀建築とそれに伴う神々の図像は「見る」人々を突き動かし、より巨大な公共祭祀建築を建造して社会を動かす仕組みを編み出した。つまり、神々と交信する儀礼空間の視認性と大衆性に重点を置いたイデオロギー操作が行われた。古典期(後200~1000年)になると、「見る」人々を突き動かし公共祭祀建築や神々の図像に加えて、

王など特定の権力者の図像と「語り」を物質化した文字が社会を動かす新たな仕組みを提供した。すなわち、王や王朝といった特定の個人・集団の利益を優先させる、より独占的・排他的なイデオロギーに変遷した。

第二章では、考古学と絵文書と呼ばれる歴史文書からアステカ王国の実像に迫る。アステカの主都テノチティトランの大神殿は、「聖なる山」のレプリカであり、ナワトル語で「蛇の山」を意味するコアテペクとも呼ばれた。コアテペクは、北方の故地アストランを出発したメシーカ人が、遍歴の旅の途中、メキシコ盆地に到達する以前に滞在した地とされる。メシーカ人のいわば正史の一部をなす移住譚が、テノチティトランの公共祭祀建築の中で再現された。大神殿はただ単に公共祭祀建築であるのみならず、支配層のイデオロギーに根差した歴史を「見せる」場でもあった。

アステカの文字は、マヤ文字ほど精密ではなかったが、表意・表音両方の機能を有して宗教や暦、天文から租税まで記録された。絵文書の作者と読み手は貴族であった。絵文書を黙読するのではなく、絵文書を人々に指し示しながら内容を語るという公共的な口頭パフォーマンスが重要であった。語られた事象の中には、メシーカ移住史のように、支配層のイデオロギーを示す内容も含まれていた。メシーカ王家のようなアステカ支配層は、絵文書もその権威を示す政治的装置であることを十分に理解して活用したのである。

第三章では、ナスカの地上絵、神殿、居住遺跡などの詳細な分布図を作成・検証すると共に、土器などの遺物の研究を通して、ナスカ社会の変遷を論じる。そしてリモートセンシング（遠隔探査）技術や人工知能（AI）を用いた地上絵の最新の成果を紹介して、地上絵はなぜ制作されたのかに迫る。地上絵に焦点を当てた研究は、アンデス文明の特徴を理解するだけでなく、他の文明と比較する上でも有益であろう。

文字を持たなかったナスカ社会では、神殿、居住地や地上絵の建設活動を通じて、様々な集団が連帯するような社会が作られた。居住地の間を移動する人々が、地上絵を見ながら反復的に歩く実践によって社会的記憶が形成された。

インカはアステカと同様に、西洋史で中世と近世の一部に相当するスペイン人の侵略直前に繋

ぎした。侵略戦争で「勝者」となったスペイン人は、インカを一枚岩的なローマ帝国に由来する都市的古代社会イメージで「理解」し、一方的に「インカ帝国」と解釈した。第四章では、この誤解がインカを実像から遠ざけていることを詳説する。考古資料、スペイン人の歴史文書、16世紀の先住民の語りやケチュア語で綴られた「ワロチリ文書」や民族誌から、無文字社会のインカの実像に迫る。インカ王はあらゆる者の頂点に君臨する「帝国」の絶対的な支配者ではなく、宇宙の揺るぎなき支配者・権力者である山の神々を畏れ敬い、その超大な力との関係を維持しながら統治した。

マチュピチュなど多くのインカの遺跡では、山の神々に儀礼を執行する基壇、石造祭壇、石や岩が多く認められる。主都クスコの公共広場では、山の神々をめぐる多様な祭祀・儀礼が執行された。様々な楽器を用いた音楽が鳴り響き、踊りや饗宴が催されたのであろう。

終章では、メソアメリカ文明とアンデス文明の比較を通して、両文明の類似点と差異点を明確にする。古代アメリカ文明を正しく理解することは、バランスの取れたよりグローバルな世界史に近づく鍵となる。メソアメリカとアンデス独特の文明の特徴を知るだけでなく、私たち人類の可能性とは何か、人類の文明の普遍性と多様性を理解する上でも極めて重要である。

あとがきでは、古代アメリカ学会の目的と活動、特に諸会員が積極的に取り組んできた中学歴史・高校世界史教科書の古代アメリカの記述を改善するための活動についても紹介する。

本書は発売即重刷され、発売後2か月ほどアマゾンでの考古学、アメリカ史やその他の地域の世界史のカテゴリで、ベストセラー1位を占めた。読売新聞、毎日新聞、産経新聞、日本経済新聞やしんぶん赤旗の書評欄でも取り上げられた。学術研究と一般社会のもつ知識の隔たりを小さくするために、新書を出版する意義は大きい。

## 研究懇談会の報告

### ●第15回西日本部会研究懇談会 『クロニカの解読とアステカ王国史』

2024年4月6日(土)、関西外国語大学6号館ICCホールにおいて、古代アメリカ学会第15回西日本部会研究懇談会を開催した。専修大学の井上幸孝会員が「クロニカの解読とアステカ王国史」というテーマで発表を行った。なお、研究懇談会を実施した時期には、ちょうど大阪の国立国際美術館で「古代メキシコ」展が開催中であり、懇談会のテーマは同展覧会とも関連するものであった。当日参加者は会員3名、非会員7名の計10名であった。

最初に井上会員による1時間の発表があった。アステカ王国の概要説明のあと、アステカ王国に関する史料クロニカの研究動向に関する説明があった。そこでは、近年のクロニカ研究では先住民クロニカの再評価がなされ、かつナワトル語史料の解読が進んできたという説明があった。さらに、スペイン人による征服が進んだ時期に、先住民の中にも征服者側と被征服者側の人々がいたことに注目するなど、先住民側の多様性を読み取ろうとする傾向が認められることが指摘された。

続いて、発表の中心テーマとなるエルナンデス・デ・アルバラード・テソソモクのクロニカが取りあげられた。議論の対象となったのは、テソソモクが残したスペイン語による「クロニカ・メヒカーナ」とナワトル語による「クロニカ・メシカヨトル」である。それらのクロニカの特徴として、著者がアステカ王家の血筋に当たるため、王家の視点から記述されていること、そして章に分けて記述する構成や読者を意識した書き方に、スペイン人によって書かれたクロニカの影響が現れていることが論じられた。最後に、テソソモクのクロニカに関する研究を含む、現在井上会員が進めているプロジェクトの紹介があった。

ほぼ予定時間通りに発表が終了したのち、参加者と発表者の間で質疑応答が行われた。参加者からは、史料の学術的信憑性の判断の仕方に関して、クロニカの記述内容の取捨選択性について、そしてクロニカに記されたア

ステカ王国が行った征服のパターンについてなどの質問があった。すべての参加者から質問、コメントが寄せられ、活発な質疑応答が行われた結果、予定時間を20分ほど超過して会の終了となった。

なお、本学会初の試みとして、この研究懇談会の様子を会員向けに11月末までオンデマンド公開している。6月1日配信の事務局メールをご覧のうえ、多くの会員にご視聴いただきたい。

(西日本研究部会幹事 土井正樹)



古代アメリカ学会  
第15回西日本部会研究懇談会

『クロニカの解読とアステカ王国史』  
井上幸孝 (専修大学)

参加費無料、  
非会員の方も  
参加できます。

日時：4月6日 土曜日 13:30~16:00  
会場：関西外国語大学ICCホール  
(インターナショナル・コミュニケーション・センター4階6411教室)

プログラム  
13:30 開場  
14:00 趣旨説明と挨拶  
14:15 発表  
15:15 質疑応答  
15:45 閉会挨拶  
16:00 終了

会場アクセス

主催 古代アメリカ学会 <https://americantigua.org>  
お問い合わせ 西日本部会幹事:土井正樹 (huarps\*kansai@iccc.ac.jp)  
古代アメリカ学会事務局 (info@americantigua.org)  
(アドレスの\*を前に載せてください)

会場 関西外国語大学ICCホール

(告知ポスター)



(会場の様子©土井正樹)



## ●第16回東日本部会研究懇談会 『修士論文発表会』

2024年3月9日(土)、東京大学本郷キャンパス総合研究博物館7階ミュージズホールにおいて、第16回東日本部会研究懇談会「修士論文発表会」を実施した。今回は対面での実施となった。

今回の研究懇談会の目的は、最近修士論文を提出した、または提出予定の若手研究者が、自身のこれまでの研究成果を報告するとともに、今後の研究計画について広く意見交換を行う場を設けることであった。

発表者は、村瀬正紘会員(東京大学大学院修士課程)と佐藤優音会員(東京大学大学院修士課程)の2名であった。また、コメンテーターは渡部森哉会員(南山大学)にお願いした。参加者は発表者を含めて12名であった。

村瀬会員からは、「インカ国家と地方社会の関係について-植民者集団ミトマクーナの実態に着目して-」と題する発表があった。本発表では、インカ国家によって派遣されたミトマクーナが移住先のアイユと結んだ関係について、植民地期アンデスにおいて編纂された巡察史料および訴訟記録の分析に基づく研究結果が報告された。

佐藤会員からは、「アンデス形成期末期におけるペルー北部中央高地の地域間交流」と題する発表があった。本発表では、形成期末期における北部中央山地の地域間交流について、土器の分布域に着目した考察が行われた。

コメンテーターの渡部会員からは、村瀬会員の発表に対し、クロナカ/巡察記録間、文書/考古学データ間の二重のズレに関する指摘や、「王領」などの用語の定義など、多岐にわたるコメントがなされた。佐藤会員の発表に対しては、本研究テーマの意義をより広い文脈に結びつける必要性の指摘や、ペルー北部山地の事例との比較に基づくコメントが呈された。

また、会場の参加者からも多くの質疑・コメントが寄せられ、活発な意見交換が行われた。

学会主催の修士論文発表会は、発表経験の

少ない修士課程の学生にとって貴重な機会である。私事ではあるが、私の初めての学会発表も、古代アメリカ学会主催の修士論文発表会(第8回東日本研究懇談会「2017年度修士論文発表会」)であり、その後の研究活動の大きな糧となった。今後もこのような学生会員のための機会が積極的に創出されることを願う。

(東日本研究部会幹事 金崎由布子)



古代アメリカ学会 第16回東日本部会研究懇談会

【修士論文発表会】  
2024年3月9日(土) 14:30~16:40  
於 東京大学総合研究博物館7F  
ミュージズホール(対面開催)

[プログラム]  
14:30-14:35 趣旨説明

14:35-15:35 発表/質疑応答①  
村瀬正紘(東京大学)  
「インカ国家と地方社会の関係について  
-植民者集団ミトマクーナの実態に着目して-」

15:50-16:40 発表/質疑応答②  
佐藤優音(東京大学)  
「アンデス形成期末期におけるペルー北部中央高地の地域間交流」

コメンテーター: 渡部森哉(南山大学)

主催: 古代アメリカ学会  
<https://americanistigua.org>

問い合わせ: \*を必ずご確認ください。  
幹事: 金崎由布子(東京大学) [kanazaki@um.u-tokyo.ac.jp](mailto:kanazaki@um.u-tokyo.ac.jp)  
副幹事: 渡部森哉(南山大学) [info@americanistigua.org](mailto:info@americanistigua.org)



会場アクセス: 西郷二、日駅より徒歩約7分

(告知ポスター)

●専修大学 国際コミュニケーション学部 異文化コミュニケーション学科 公開講座 「メキシコ古代文明への誘い—マヤ、アステカ、テオティワカン—」

井上 幸孝（専修大学）

昨年から今年にかけて、国内の3つの博物館・美術館において特別展「古代メキシコ—マヤ、アステカ、テオティワカン—」が開催された。杉山三郎会員の尽力と熱意によって実現した特別展で、東京・上野の東京国立博物館（2023年6月16日～9月3日）、福岡の九州国立博物館（2023年10月3日～12月10日）、大阪・中之島の国立国際美術館（2024年2月6日～5月6日）の3か所を巡回した。筆者も公式図録の翻訳や執筆に携わる機会を得た。

（火）の夕刻に専修大学神田キャンパス 10号館（140年記念館）内の黒門ホールで行われ、約80名が来場した。なお、本公開講座のチラシには「20倍楽しむ」の文言が見られるが、これはメソアメリカ文明が二十進法を採用していたことに因む。



公開講座の様子

公開講座のチラシ

筆者が所属する専修大学国際コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科（東京都千代田区）では、東京国立博物館での会期に合わせ、広く区民や市民一般に古代メキシコについて知ってもらおうという意図のもと、公開講座を開催する運びとなった。この公開講演会は同学科が主催し、専修大学現代文化研究会が共催となり、令和5年度千代田学事業、在日本メキシコ大使館、古代アメリカ学会の協力を得た。2023年8月1日

公開講座は2部構成で行われ、第1部・第2部ともに井上が講師を務めた。会場にはメキシコ大使館の関係者も来場した。冒頭、根岸徹郎（国際コミュニケーション学部長）の挨拶に続き、メキシコ大使館の文化担当官バレリア・ソリス氏からは日墨関係の深化を期待する挨拶があった。

第1部「メキシコの古代文明」では、3000年以上に亘るメソアメリカ文明の歩みを追うとともに、トウモロコシ農耕、人身犠牲、球戯などその特徴のいくつかを、特別展で展示されている作品の紹介も含めながら概観した。続く第2部「メキシコの遺跡をめぐる」では、メキシコの世界遺産や古代都市の遺跡の現状について見たうえで、代表的な遺跡として、テオティワカン、パレンケ、チチェン・イツァ、テノチティトラン（テンプロ・マヨール）の4か所について、写真を多く交えて解説した。また、番外編として、トニナー、トゥーラ、モンテ・アルバンなどの遺跡も取り上げた。その後、中国宗教を専門とする土屋昌明（専修大学国際コミュニケーション学部教

授) がコメントし、さらにフロアとの間で活発な質疑応答がなされた。総じて参加者の関心は高く、質疑応答はメキシコやラテンアメリカのみならず、世界各地の宗教との比較にも及んだ。既に特別展を観覧したという人もいれば、受講後に博物館に足を運んだ方もおり、本公開講座の翌日、特別展の会場で本公開講座の参加者に再会し、さらなるご質問をいただくという場面もあった。

日本にいながらにして古代アメリカ文明を肌で感じられる機会は決して多くないかもし

れない。けれども、今回の特別展と公開講座を通じて潜在的な関心の高さをあらためて感じることができた。

ところで、大阪での会期を前に、筆者を含む4名の会員(青山和夫、井上幸孝、坂井正人、大平秀一)の共著による新書が出版された。青山和夫編『古代アメリカ文明—マヤ・アステカ・ナスカ・インカの実像』(講談社現代新書、2023年12月出版)もご覧いただければ幸いである。(自著紹介記事参照 pp. 21~22)

## ●日本 ペルー外交関係樹立 150 周年記念

### 天理ギャラリー第 180 回展「アンデスのツボ — 器で旅する北ペルー —」

荒田 恵（天理大学附属天理参考館）

本展は、東京天理教館 9 階天理ギャラリーにて 2023 年 9 月 9 日（土）より 12 月 2 日（土）まで開催した展覧会である。天理大学附属天理参考館が主催し、「令和 2 年度・3 年度公募型メディア展示」事業の支援による国立民族学博物館の特別協力、ペルー大使館、外務省、古代アメリカ学会、専修大学国際コミュニケーション学部の後援を受けた。また、2023 年は日本とペルーが国交を樹立して 150 年の記念の年に当たることから、“日本 ペルー外交関係樹立 150 周年”の記念事業の一つとしても開催することになった。

本展は、2021 年に開催した第 86 回企画展「器にみるアンデス世界—ペルー北部地域編—」の巡回展と位置付けて開催し、ペルー北部地域を対象として土器資料とその贋作を展示することで、当時の世界観に触れてもらい、それらが現代ペルー社会において古代とは異なる脈絡で再生産されている様子を紹介した。そして専門的な内容を分かりやすく説明するためのサブストーリーを設定し、各コーナーに設置したポイントで、QR コードと紐づけたオリジナル解説漫画を来館者自身のスマートフォンあるいはタブレット端末で閲覧できるサービスを提供した。さらに、「令和 2 年度・3 年度国立民族学博物館公募型メディア展示」事業の支援により制作したタブレット端末で、笛吹ボトルの内部構造を閲覧する体験型のメディアコンテンツを提供した。

関連イベントとして、10 月 7 日（土）と 10 月 14 日（土）の 13 時 30 分から 15 時に、専修大学神田キャンパス 5 号館 5 階 551 教室にて記念講演会を実施した。山形大学教授の坂井正人会員と国立民族学博物館名誉教授の関雄二会員を講師に招いて、それぞれ「ナスカの地上絵の調査と解説：リモートセンシングと人工知能」と「アンデス文明の遺産を活かす—盗掘を回避するための地域社会との共創」と題してご講演いただいた。それぞれの参加人数は 46 名と 32 名で、受講生は興味深い内容に熱心に聞き入っていた。なお、これらの記念講演会につ

いては、後援を受けたペルー大使館から、両国の外交関係樹立 150 周年にふさわしいイベントであるとの評価を受けた。さらに、開幕日の 9 月 9 日（土）と、記念講演会の翌日の 10 月 8 日（日）、10 月 15 日（日）の午前と午後にそれぞれ 2 時間ずつ、展示解説と VR ゴーグル体験イベントを実施した。なお、VR ゴーグルのコンテンツも「令和 2 年度・3 年度国立民族学博物館公募型メディア展示」事業の支援により制作した。体験者は巨大化した笛吹ボトルの内部に入ってその構造を体感しながら観察することができ、さらに左のコントローラーに付随したミニチュア三次元データでは、より詳細に内部構造を確認できるよう工夫した。3 回の延べ参加者数は 30 名で、そのうち 13 名が VR ゴーグルコンテンツを体験した。

会期中の来場者数は 477 名であったが、小規模ながら楽しめる、面白い展示であったなどのコメントが寄せられ、好評のうちに閉幕を迎えた。



（東京天理教館 9 階 天理ギャラリー入口）



（東京天理教館 9 階 天理ギャラリー展示室）

## ●ペルー独立確立 200 周年 2024 天理大学附属天理参考館第 95 回企画展「器にみるアンデス世界—ペルー南部地域編—」

荒田 恵（天理大学附属天理参考館）

本展は、天理大学附属天理参考館 3 階企画展示室にて 2024 年 4 月 17 日（水）より 6 月 3 日（月）まで開催した展覧会である。天理大学附属天理参考館が主催し、ペルー大使館、古代アメリカ学会、天理市、天理市教育委員会、歴史街道推進協議会の後援、そして山形大学ナスカ研究所および山形大学附属博物館の協力をいただいた。また、2024 年はペルーがスペインからの独立を確立して 200 年の記念の年に当たることから、“ペルー独立確立 200 周年 2024”の記念事業の一つとしても開催することになった。

本展は、2021 年に開催した第 86 回企画展「器にみるアンデス世界—ペルー北部地域編—」の続編であり、ペルー南部地域とボリビアにまたがって栄えた文化を対象として、土器や木器の真作と贋作を同時に展示した。これにより、中央アンデス地帯南部における古代の世界観に触れてもらい、ペルー南海岸を中心に、それらが現代社会において異なる脈絡で再生産されている様子を紹介した。また、山形大学ナスカ研究所と山形大学附属博物館の協力を得てパネル展示を行い、ナスカの地上絵に関する最新の研究成果と、同時進行で行われている保護活動の現状について紹介した。さらに企画展示室に隣接する 3 階ロビーには、山形大学ナスカ研究所と山形大学附属博物館から借用した、Google Earth を使用した映像「ナスカの地上絵と神殿をめぐる巡礼：巨大な地上絵の分布規則」を上映するコーナーと、ナスカ台地の航空写真を 300 分の 1 の縮尺で印刷したマットに乗って地上絵を見つけてもらう体験コーナー「地上絵を探せ！」を設けた。これらに加えて、ペルー大使館より提供を受けた独立確立 200 周年記念映像を視聴できるコーナーも設けた。

関連イベントとして、4 月 24 日（水）の 13 時 30 分から 15 時まで筆者が講師を務めたトーク・サンコーカン「インカってなに？」を地下 1 階の研修室で行い、38 名の受講生が参加した。また同日の午後に 2 階ホールに特設カフェを設置してペルー産コーヒーを 1 杯 220 円で提供したところ、盛況なイベントとなり 44 名の参加者

が集まった。さらに 5 月 4 日（土）には山形大学教授の坂井正人会員を講師に招いて「ナスカの地上絵と人工知能：新展開の現地調査をめぐる」と題した記念講演会を研修室で開催した。別途参加料が必要であったにもかかわらず、43 名の熱心な受講生が参加し、講演後も質問が絶えない盛況ぶりであった。さらに、4 月 22 日（月）、5 月 20 日（月）、6 月 3 日（月）の 12 時 30 分から 13 時 20 分にギャラリートークを実施し、3 回の延べ参加者数は 71 名であった。

また本展は、天理大学や他大学の授業で活用される機会が多く、博物館学に加えて、考古学、ラテンアメリカ社会文化、美術史、そして科学と現代を扱う一般教養の授業まで、多岐にわたる講義を受講する、延べ 320 名を超える大学生が見学に訪れた。通常より家族連れで訪れる来館者が多くみられ、会期中の来館者数は 2,477 名にのぼり、好評のうちに閉幕を迎えることができた。



(天理大学附属天理参考館 3 階企画展示室)



(ギャラリートーク風景)

---

---

## 事務局からのお知らせ

---

---

### 1. 第 29 回研究大会・総会の開催について

古代アメリカ学会第 29 回研究大会・総会を、2024 年 12 月 7 日（土）～12 月 8 日（日）の 2 日間にわたって、慶應義塾大学で開催いたします。ご多忙のこととは存じますが、万障お繰り合わせの上ご参加いただきますようお願いいたします。

本学会では研究発表について審査制をとっています。発表を申請される会員は、研究大会実行委員長による別紙「第 29 回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について」をご参照の上、研究発表の申請をしていただきますようお願いいたします。

なお、研究大会、総会のご出欠については、メールにてお知らせした URL から 2024 年 9 月 30 日（月）までにご回答ください（締切厳守）。総会にご欠席の方も、同じ URL から委任状を提出いただけますのでご協力をお願いいたします。

例年総会後に開催してきた懇親会につきましても、現在のところ、対策を講じたうえで開催の予定です。

記

古代アメリカ学会第 28 回研究大会・総会

(1) 日時：一日目 2024 年 12 月 7 日（土）

研究大会 13:00～17:00（予定）

総会 17:00～18:00（予定）

懇親会 18:30～（未定）

二日目 2024 年 12 月 8 日（日）

研究大会 09:00～12:00（予定）

（発表本数が多い場合は午後の部も行います）

(2) 会場：慶應義塾大 日吉キャンパス 来往舎

この件につきましてご不明の点がございましたら、事務局（[info@americaantigua.org](mailto:info@americaantigua.org)）までお問い合わせ下さい。

### 2. 第 29 回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について

古代アメリカ学会第 29 回研究大会実行委員長  
渡辺 裕木

会員より申請があった研究発表等については、研究大会実行委員会が審査をおこなったうえで発表許可の可否について通知いたします。

発表を申請される会員は、以下の要領にしたがって申請して下さい

記

以下の事項を記入し、**Word ファイル**にて事務局に添付ファイルでお送り下さい。

1. 発表申請者（会員に限ります）
2. 発表申請者住所・e-mail（発表申請者に対して審査結果をメールで通知します）
3. 発表カテゴリー（研究発表、調査速報、ポスターセッションのいずれか）
4. 発表タイトル
5. 発表著者（共同発表の場合、研究大会抄録、プログラム等に記載する順番通りに記入してください）
6. 口頭発表者（実際に口頭発表をおこなう者。会員に限ります）
7. 発表要旨（研究発表：1200 字程度、調査速報：800 字程度、ポスターセッション：800 字程度。要旨とは別に 1-2 枚の図版等を添付することも可としますが、その場合も要旨のテキストと同じファイルの中に組み込み、一つのファイルにして送付してください）A4 判にて、1 ページ 40 字×36 行、横書き、余白は上 35 mm、下・左・右 30mm、文字は 10.5 ポイントで作成してください。

（\*発表時間は、質疑応答を含め調査速報 20 分、研究発表 30 分を予定しています。ポスターセッションは A0 で 2 枚以内によるものとします。）

\*送付先：[info@americaantigua.org](mailto:info@americaantigua.org)（学会事務局）

\*締切：2024 年 9 月 30 日（月）午前 10 時（メール必着）

古代アメリカ学会では、会員が共有する関心テーマについて集中的に議論できる場を提供するため、第 20 回研究大会より分科会枠を導入しています。分科会は、特定の研究テーマに即して、代表者を含めて 3-5 名のグループで発表・討論する場です。分科会に割り当てる時間は、口頭発表者数×20 分を予定しています。この時間をどのように使うかは、分科会ごとに判断してください。口頭発表の時間を削

ってコメンテーターを導入したり、討論の時間を増やすことも可能です。なお分科会は、通常の研究発表・調査速報と同じ会場で実施され、発表時間が重なることはありません。ただし口頭発表できる機会は、研究発表・調査速報・分科会発表をあわせて一人1回です。分科会はコメンテーターを指名することができますが、それは口頭発表として数えません。分科会を組織する方は、分科会のタイトル、発表者（変更不可）、趣旨説明（1200字程度）、全発表者の要旨（各800字程度）を取りまとめて、代表者として申請してください。送付先・締切は他の発表と同じです（上記をご覧ください）。なお分科会代表者・発表者は、オンライン出欠確認フォームで「発表申請」の「有」を選択してください。

審査結果については、10月14日（月）頃までに、申請者にメールで通知いたします。この通知と同時に、発表許諾者にたいしては、抄録要旨の原稿依頼・執筆要領などもお知らせしますので、決められた期日までにご提出をお願いします。

審査基準については、以下の「参考」をご参照下さい。とくに、単独発表か共同発表か、また著者の記載順をどうするかなどについては、あらかじめよくご調整のうえ申請をなさるようお願いいたします。なお、発表者となる会員（共同発表者を含む）は、9月30日の時点で前年度分までの会費の滞納がないことを条件とします。

\*参考 「古代アメリカ学会研究大会運営に関する申し合わせ（平成23年12月2日役員会決定）」より抜粋

・発表についての審査は、以下の原則に照らして判断することとする。

（内容）

(1) 研究大会でおこなわれる発表は、現在の一般的な研究状況において一定の水準に達していなければならない。

(2) 発表の内容が、他の研究者の著作権やデータに関する権利を侵害してはならない（オンライン開催の場合、著作権には例年以上に配慮を要しますのでご注意ください。）

（形式）

(1)（口頭発表をおこなうことができる者）

口頭発表者（実際に口頭で発表をおこなう者）は会員でなければならない。ただし実行委員会が企画

した招待講演・発表等についてはこの限りではない。

また、口頭発表者は、会員であれば第2発表者以下でも差し支えない。

(2)（発表者および共同発表者の記載順）

発表者名（単独発表か共同発表か、共同発表の場合発表者記載順など）は、データに関する権利等の観点から適切でなければならない。このため、口頭発表者が会員であれば、非会員は第2発表者以下の共同発表者となることのできる。

(3)（複数の口頭発表についての制限）

1回の研究大会において会員が口頭発表をおこなう機会は一人1回とする。ただし、複数の共同発表者（記載順を問わない）となることのできる。

以上

### 3. 会費納入のお願い

会費が未納となっている方は、先にお送りいたしました振込用紙を使用してお振込みいただくか、または以下の口座に直接お振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

なお2年度分以上、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

ゆうちょ銀行（振替口座）

口座番号：00180-1-358812

加入者名：古代アメリカ学会

みずほ銀行山形支店

口座番号：1211948(普)

口座名義：古代アメリカ学会

ゆうちょダイレクトをご利用の場合は、通信文欄にお支払い年度をご記入ください。

（例）2024 ネンドカイヒ ※数字および全角カタカナのみの入力となります。

PayPalでのお支払いをご希望の方は、[account@americaantigua.org](mailto:account@americaantigua.org)までご連絡ください。PayPalご利用の場合、決済は日本円でおこなわれます。年会費に手数料（2023年2月現在：海外決済：4.1%+40円、国内決済：3.6%+40円）を含めた額をお支払いいただくこととなりますので、ご了承ください。

【重要】学生会員の会費納付書への所属機関記入について

本学会では学生会員に会費優遇制度を設けていますが、学生期間終了後は速やかに一般会員資格に移行していただくために、「払込取扱票」で納入する場合には所定欄に現在の在籍校と学年を明記していただいておりますのでご協力をお願いいたします。なお、ネットバンキング等を通じて納入する場合は、振り込み前に事務局へ現在の在籍校と学年をご連絡願います。

【重要】所属機関が会費納入する際の納付書再発行費用について

文部省科学研究費補助金等で会費を納入いただくにあたって、会員が所属する機関から納付書を再発行するよう依頼があった場合、その送付にあたっての送料は納付者の負担となります。ご希望される方は、あらかじめ学会事務局までお問い合わせください。

〈事務局からのお願い〉

現在、古代アメリカ学会では、学会とかかわる諸情報の連絡、および周知にメールを使用しております。まだ学会にメールアドレスを登録されていない方や、学会からメール連絡が届いていないという方がおられましたら、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご協力をお願いいたします。すでにご登録いただいている方も、メールが返送されてくる場合がございますので、当学会事務局のアドレスからのメールが受信可能となるよう、設定をお願いします。特に Gmail などのフリーメールをご利用の方は、事務局からのメールが迷惑メールとして処理されないよう、学会事務局アドレスを登録するか、迷惑メール対象から解除する手続きを行ってください。

## 4. 原稿募集

### ①会誌『古代アメリカ』の原稿募集

本学会の会誌『古代アメリカ』第 28 号（2025 年 12 月発行予定）に掲載する、「論文」・「調査研究速報」・「書評」の原稿を募集します。「調査研究速報」では、発掘などのフィールドワークの成果・報告はもちろんのこと、文献調査の報告やラボラトリーでの分析結果報告などの投稿もお待ちしております。投稿希望者は、最新の寄稿規定および執筆細目（本

学会 HP 掲載）をよくお読みの上、ご投稿ください。

投稿に際しては「投稿エントリーカード」の提出が必要となります。「投稿エントリーカード」は、本学会 HP よりダウンロードしてください。第 28 号への掲載を希望される場合の締め切りは、カテゴリにかかわらず、2025 年 5 月 20 日です。「論文」と「調査研究速報」の掲載の可否は、規定による査読（原稿受領後 1～2 か月程度で終了予定）の結果を踏まえ、編集委員会で決定します。

お問い合わせ先：

運営委員、会誌編集担当

E-mail : aant.edit@gmail.com

### ②会報「50 号」の原稿募集

会報の内容を充実させ、会員の皆様はもちろん、多くの方々に古代アメリカの情報を広げたいと考えています。以下の要領で皆様からの原稿を募集しますので、会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようご協力お願いいたします。

#### 【内容】

○エッセイ、論考など

特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会の会報記事としてふさわしいテーマ。

○調査・研究の通信

最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。会誌『古代アメリカ』には投稿しないような**簡易の情報も可**。

○新刊紹介

古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。

○その他

会員にとって有益な学術情報。

#### 【形式】

○原稿字数は、写真・図版を含めて 4000 字（会報 2 ページ分）以内とします。超える場合は会報担当委員まで事前にご相談ください。

○原稿はワードファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当委員まで事前にご相談ください。

#### 【掲載】

○掲載に当たっては、会報担当委員から内容についての問い合わせや修正等のご相談をする場合があります。また、投稿原稿が多数の場合は当



該号では掲載されないこともあります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

○投稿原稿以外に、会報担当委員から依頼した原稿も掲載する予定です。

**【投稿先・締切】**

○添付ファイルの形で下記までメールにて送信してください。

お問い合わせ先：

運営委員会報編集担当

E-mail : [aant.newsletter@gmail.com](mailto:aant.newsletter@gmail.com)

(会誌とは異なるのでご注意ください)

○投稿締切 2025年6月15日

○発行予定 2025年7月下旬

／／／

〈編集後記〉

前号から特集記事の公募を試みているが、今回は依頼原稿だけでなく、メーリングリストのお知らせを見ての応募もあった。また、特集記事では非会員の方にもご執筆をお願いしている。ご寄稿くださった皆様に厚く感謝を申し上げたい。次号は記念すべき 50 号になる。会員の皆様にはぜひ積極的にご寄稿いただきたい。

(五木田)

今回は特集記事として研究現場のダイバーシティ最前線として原稿を募集した。ご寄稿くださった方は男性 1 名と女性 4 で、この課題に対する意識の違いが現れたと感じている。興味をもってくださっている男性会員からの声もちらほら聞こえてくるが、まだ意見を表出する段階にはないのかもしれない。ぜひ今後もこのような機会を設けて行きたいと考えている。

(瀧上)

発行 古代アメリカ学会  
発行日 2024 年 7 月 31 日  
編集 古代アメリカ学会  
会報担当：五木田まきは  
瀧上舞

古代アメリカ学会事務局  
〒101-8425  
東京都千代田区神田神保町 3-8  
専修大学神田キャンパス 1 号館  
井上幸孝研究室内  
E-mail : info@americaantigua.org  
郵便振替口座 : 00180 - 1 - 358812  
ウェブサイト URL : <https://americaantigua.org/>